公開版

2021（令和 3）年度

2 回生進級時アンケート報告書

京 都 大 学 国 際 高 等 教 育 院

目　次

1　調査の概要と目的 …… 1
2　回答者の属性と回答率 …… 2
3　志望意識と専門分野 …… 5
4　学習意欲 …… 10
5　大学教育での向上感 …… 15
6　ILAS セミナー・実習・実験科目の受講 …… 21
7　履修動向と成績 …… 28
8　成績評価への納得度 …… 35
9　学生生活 …… 38
10　学生の期待 …… 45
11　教養・共通教育についての意見 …… 47
12　まとめ …… 53

【資料】2021 年度 2 回生進級時アンケート …… 57

１．調査の概要と目的

2回生進級時アンケートは、2003年度入学者を対象として2004年4月に初めて実施されて以来、長年に亘って学生の学習活動についての意識変化を追跡してきた。初期においては紙を媒体とした調査を行っていたが、2007年度からは京都大学で整備された教務情報システム（KULASIS）による回答方法を採用している。毎年の調査結果は国際高等教育院のホームページに掲載し、学内外に公表されている（URL：http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/introduction/inspection ）。

本調査の第一の目的は、学生が入学後1年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について2回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることである。

本調査の第二の目的は、京都大学の教育活動に対する検証である。大学機関別認証評価　大学評価基準（第3期）では、基準6-4、6-6、6-8 のそれぞれにおいて、「適切な授業形態、学習指導法が採用されていること」「公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていること」「適切な学習成果が得られていること」が謳われており、これを受けて京都大学の第三期中期計画　計画番号9において、「授業評価アンケートや、卒業生・修了生、就職先等関係者へのアンケート等の実施により学生等の意見を聴取し、教育改善に活用する」としている。このためには、入学時から卒業時に至るいくつかの定点で、学生意識の変化を調査することが必要であり、本アンケートはそのような検証の一環として有用な質問を設けている。また2018年度より、卒業生進路調査アンケートとの連携が図られ、卒業時に尋ねた教養・共通教育に対する学生意識の結果を適時参照できるようになった。

調査対象： 学部新2回生（2020年度入学生）全員

実施期間： 2021/04/01 ～ 2021/06/02

調査方法： KULASIS上でのアンケート回答方式をとっている。上記の調査期間に各学部新2回生が履修登録確認のためKULASIS にログインした際にアンケートへの協力願いを掲示し、回答フォームに入力するという方式を採用した。アンケート全文は末尾に添付している。

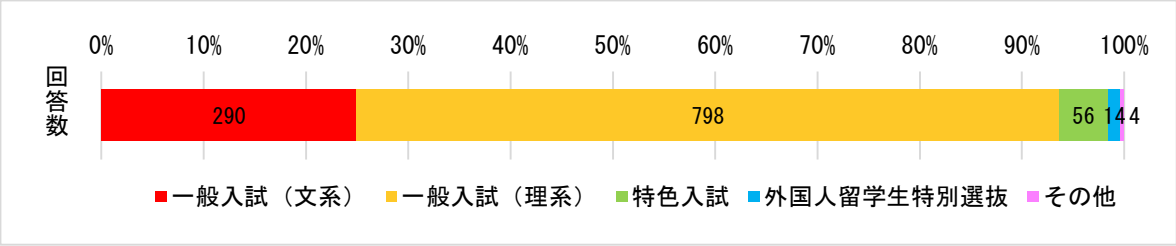
注 1）本報告書において文系・理系の区分をする場合、文学部、教育学部、法学部、経済学部、総合人間学部は文系学部に、理学部、医学部、薬学部、工学部、農学部は理系学部に含めている。
注 2）一般入試における文系・理系の区分は総合人間学部、教育学部、経済学部については募集区分による。その他の学部は注１と同様である。
注3）各設問において、回答が空白の場合は回答数より除かれている。

２．回答者の属性と回答率

最初に回答者の属性に関する質問をし、アンケート全体での区分解析を可能にした。特に平成 29 年度から、学部別に加えて、一般入試入学者（文系・理系）、特色入試入学者、留学生の区分を設け、必要に応じて解析区分として採用した。

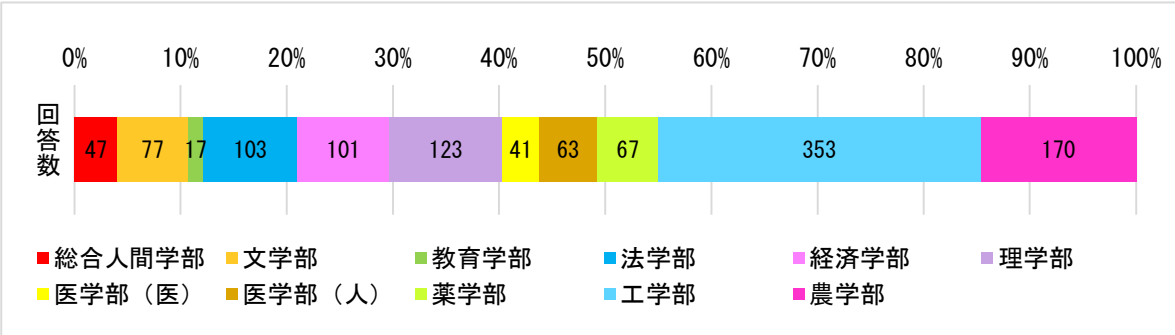
Q.01　あなたが京都大学に入学した入試区分を選択してください。
①一般入試（文系）　②一般入試（理系）　③特色入試　④外国人留学生特別選抜　⑤その他*
＊「その他」には外国学校出身者、Kyoto –iUP 生等を含む

＜図１＞



Q.02　あなたの学部を教えてください。
①総合人間学部　②文学部　③教育学部　④法学部　⑤経済学部　⑥理学部　⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科）　⑨薬学部　⑩工学部　⑪農学部

＜図２＞



＜表１　学部別アンケート回答者数・回答率＞

学部	学年在籍者数	回答者数	回答率	文理
総合人間学部	125	47	37.60%	34.78%
文学部	223	77	34.53%	
教育学部	61	17	27.87%	
法学部	339	103	30.38%	
経済学部	244	101	41.39%	
理学部	324	123	37.96%	42.60%
医学部	214	104	48.60%	
薬学部	84	67	79.76%	
工学部	987	353	35.76%	
農学部	309	170	55.02%	
合計	2,910	1,162	39.93%	

（学年在籍者数は 2021/4/1 現在のアンケート対象者数）

学部別のアンケート回答者数ならびに回答率を表１に示す。各学部に新２回生ガイダンス等でのアンケート調査へのご協力をお願いし、また KULASIS にて再々回答を促したが、本年度の回収率は 39.9%(1,162 名)となり、昨年度の 43.9%より 4 ポイント減少した。なお、学年在籍者の半数にも満たない回答に基づいた解析ではデータの信頼性という観点、さらには教育改善への取組という意味においても大いに問題であり、来年度以降も継続して改善策を講じる必要がある。

＜表２　学部別アンケート回答率の変遷＞

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	(*)平均回答率
総人	30.1%	30.6%	36.7%	57.8%	59.2%	48.0%	54.5%	37.7%	22.5%	34.7%	20.0%	31.2%	15.7%	28.2%	34.9%	37.2%	37.6%	36.6
文学	26.9%	25.6%	28.6%	50.5%	50.2%	49.8%	49.8%	41.3%	23.7%	30.4%	29.8%	28.9%	29.6%	37.9%	32.7%	47.5%	34.5%	38.3
教育	34.9%	29.2%	35.5%	37.7%	37.7%	44.3%	42.6%	32.8%	23.3%	26.2%	22.6%	17.7%	28.1%	29.5%	25.8%	54.8%	27.9%	36.2
法学	19.3%	16.8%	30.4%	44.1%	44.4%	42.6%	42.4%	30.2%	17.8%	31.7%	25.9%	18.8%	19.2%	25.0%	33.7%	34.9%	30.4%	33.0
経済	14.8%	12.9%	25.4%	37.3%	36.3%	37.5%	42.3%	44.8%	21.3%	31.0%	24.6%	19.8%	14.2%	20.9%	31.9%	32.5%	41.4%	35.3
理学	30.1%	29.9%	38.1%	49.4%	50.2%	58.0%	53.3%	45.9%	29.9%	35.2%	33.2%	28.8%	29.2%	35.6%	34.7%	52.4%	38.0%	41.7
医学	39.7%	25.7%	20.1%	33.3%	37.2%	34.6%	35.3%	32.7%	15.9%	26.4%	22.1%	21.3%	16.9%	22.3%	43.7%	38.6%	48.6%	43.6
薬学	25.8%	19.1%	35.6%	55.2%	57.8%	51.8%	52.3%	56.0%	30.5%	50.6%	34.5%	39.3%	32.2%	82.6%	62.1%	56.3%	79.8%	66.1
工学	74.7%	33.7%	35.5%	45.6%	45.2%	44.5%	50.3%	41.5%	23.2%	36.6%	23.4%	25.4%	20.8%	31.6%	29.7%	40.3%	35.8%	35.3
農学	19.5%	23.8%	34.1%	45.2%	46.1%	46.7%	50.2%	39.6%	26.6%	34.2%	32.8%	23.4%	19.5%	35.5%	44.1%	63.8%	55.0%	54.3
全体	41.8%	26.5%	32.2%	44.9%	45.5%	45.2%	47.7%	40.1%	23.1%	33.9%	26.4%	24.7%	21.4%	31.9%	34.8%	43.9%	39.9%	39.6

（＊1)2019年～2021年の３年間の平均提出率

（＊2)黄色は回答率上位２学部、水色は回答率下位2学部

表２には、2005年度（平成17年度）以降の学部別アンケート回答率の変遷を示した。最近3年間の平均回答率を見ると、40%を超える高い学部（薬学、農学、医学、理学）から、30数%程度の低い学部（法学、経済、工学）まで大きな差があり、全体、文系、理系として集計するときは、回答率の差による影響を受けることに留意されたい。近年、各学部の協力もあり回答率が大きく改善してきている。今年は、特に薬学の回答率が約80%であった。薬学部では2018年より新学期に実施される２回生ガイダンス

で積極的に回答を促していただいた成果が現れており、今後の回答率改善策を考える上で大いに参考になる。全体として昨年の回答率は一昨年よりも約9%増加し、今年は昨年より4%減少したが、これはコロナ感染症対策のために新学期開始時期の授業形態が昨年、今年と異なったことの影響があると考えられる。

３．志望意識と専門分野

大学はホームページやパンフレット、オープンキャンパス等のさまざまな方法により、各学部の学術分野、教育内容、学生生活等を広報し、入学者に期待する資質をアドミッションポリシーとして公開している。入学試験という関門を通過して京都大学の各学部に入学した学生は自らが志望する分野を選択しているはずであるが、将来の活躍分野をどこまで具体的に意識しているか、またそれが学習の動機付けに結びついているか、は入学後の教育効果を大きく左右するものと思われる。つまり、

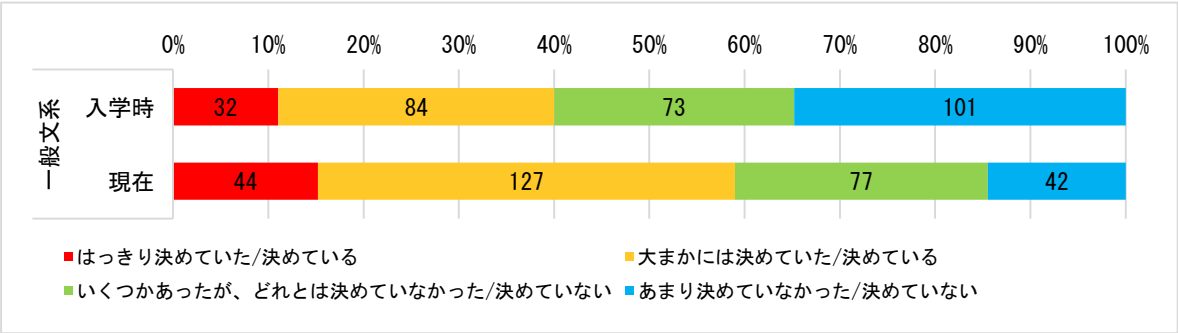
志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習効果 → 向上感（満足度）

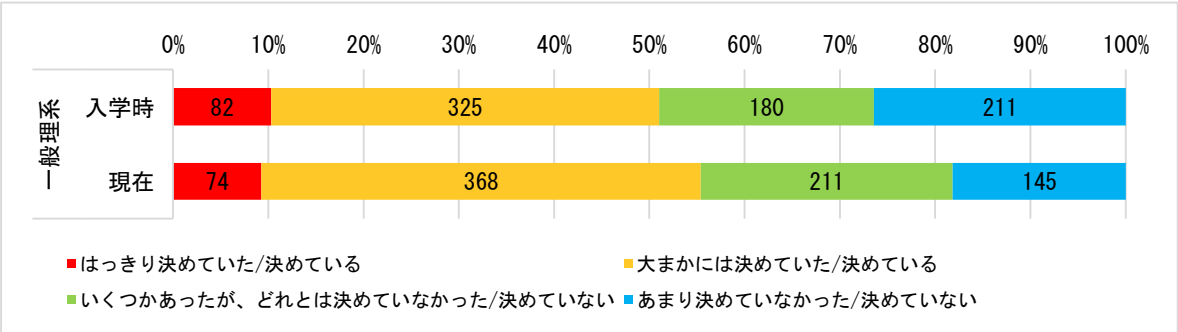
の正の連鎖を期待する。一方、その志望意識とこれから学ぶことになる専門分野との一致度が良くない場合は、負の連鎖を起こす恐れがある。アンケートの初めにこの重要点について Q.03～Q.06 で把握し、以後の学習行動や学習効果との相関を考察した。

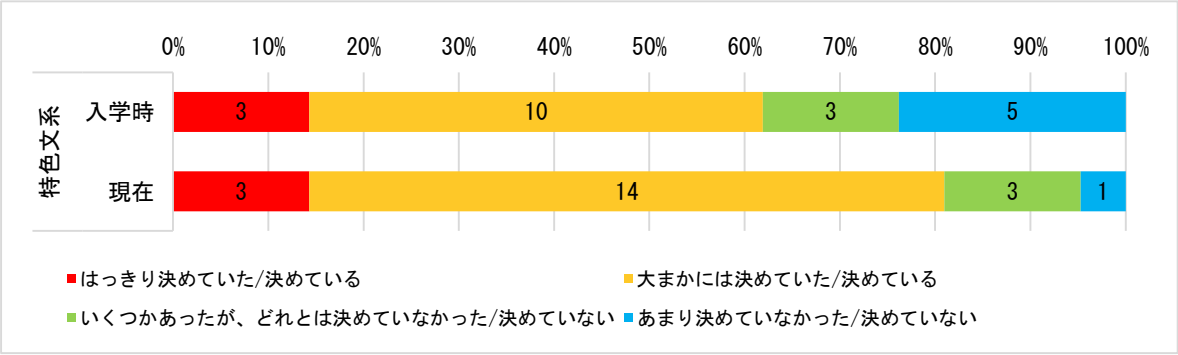
Q.03　あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。
①はっきり決めていた　②大まかには決めていた　③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

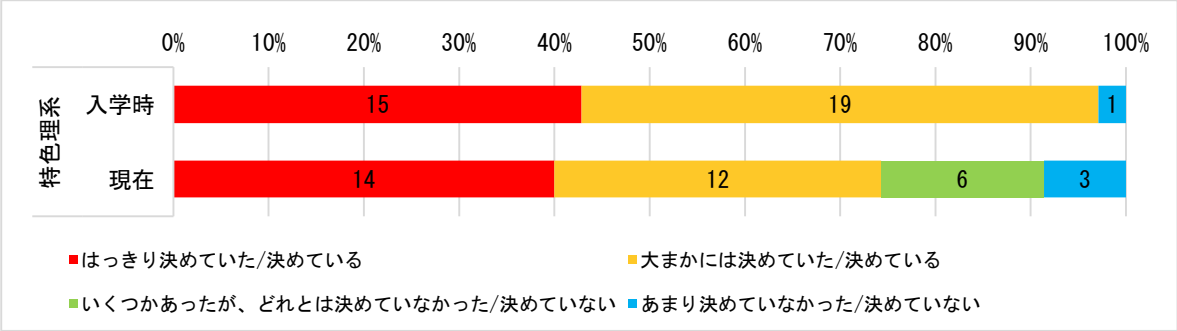
Q.04　今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。
①はっきり決めている　②大まかには決めている　③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

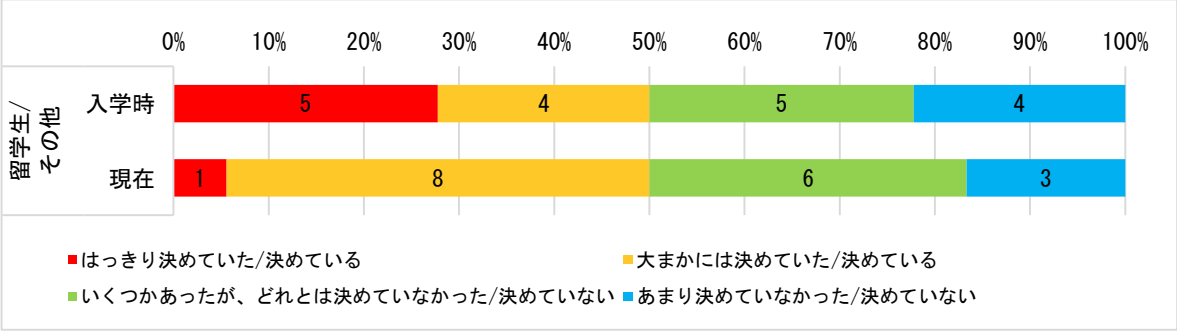
＜図３　志望意識・入試区分別＞











Q.03 と Q.04 は入学時と 1 年後の現在で、志望意識を尋ねた質問である。平均として、文系、理系とも 10～15％の「はっきり決めている」を含む約 55～60％の学生が将来活躍したい分野を「(大まかには) 決めている」。また、約 15～20％は現在でも「あまり決めていない」と答えている。専門分野の中で具体的な活躍分野がイメージできていないということかも知れないが、専門分野そのものに志望意識をもてない場合は、今後の勉学のモチベーションを保てるかという不安が残る。この点は Q.06 で確かめることになる。

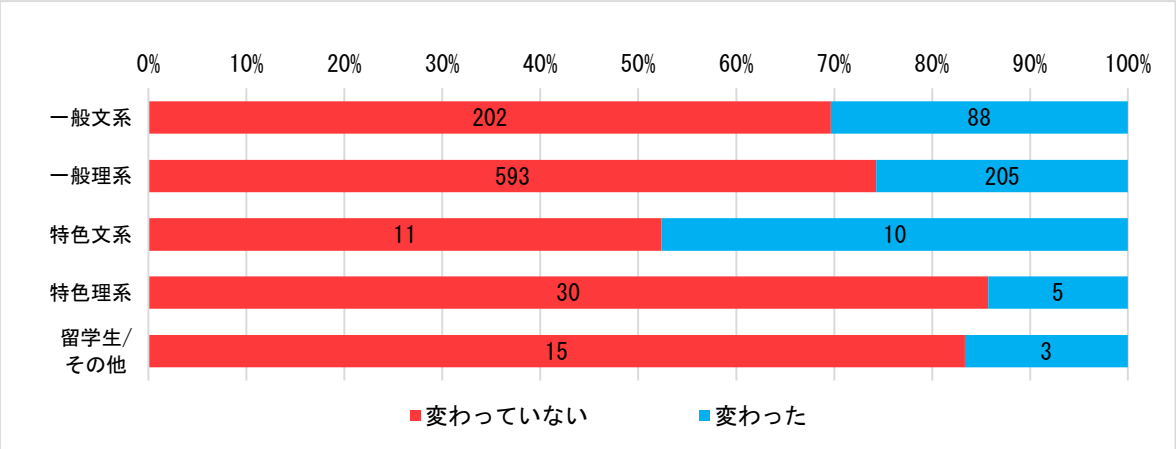
Q.03 と Q.04 を比較すると、全体として例年、1 年後の現在の方が「はっきり決めている」と「大まかには決めている」の回答合計がやや増加するのが普通であったが、今年は一般入試、特色入試とも文系の増加が約 20%と増えている。理系は例年と変わらない傾向であり、(良い意味で) 文系の動向を今後注視していきたい。一方、一昨年・昨年と比較して、「決めていない」が (文系：30→19→15%、理系：22→18→18％) と減少傾向となっており、入学後に次第に志望意識が明確になるという好ましい傾向を示している。

一般入試と特色入試の入学者を比較すると、特色入試制度の趣旨を反映して「(大まかには) 決めてい

る」の比率が特色入試区分では各段に大きくなる傾向にある。しかし理系の特色入試では昨年・今年と「(大まかには) 決めている」の比率が入学 1 年後に 20%前後減少している。特色入試の区分では回答数が少なく、統計的に有意な結果とは言い難い面もあるが、特色入試が開始されて数年が経過し、その意義が薄れてきていることを示唆していると考えると、注意を要する結果と言える。同じく、留学生の区分のデータも回答数が少ないので有意性は明白ではないが、これまで高いレベルを保っていた志望意識が今年大きく低下したように見受けられる。一昨年・昨年と 70%前後あった「はっきり決めている」「大まかには決めている」が 50%となっており、今後の動向を注視する必要がある。

Q.05　入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。
①変わっていない　②変わった

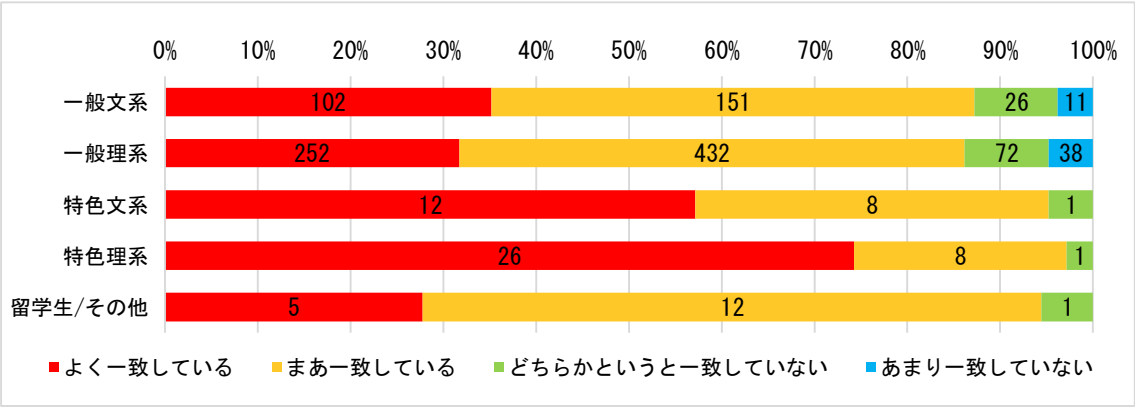
＜図 4　希望分野の変化・入試区分別＞



Q.05 では、 1 年間の大学生活を経て、志望分野が変化したかどうかを問うている。図 4 には入試区分別の結果を示したが、昨年と同様に一般文系・一般理系学生では約 25～30%の学生が「変わった」と答えている。学部によるばらつきが大きいものの、学生が一年間の学部教育や学生生活を過ごす間に次第に将来の方向性を定めてきたとも解釈できる。特色入試や留学生区分では回答数が少なく、年々のばらつきが大きい。

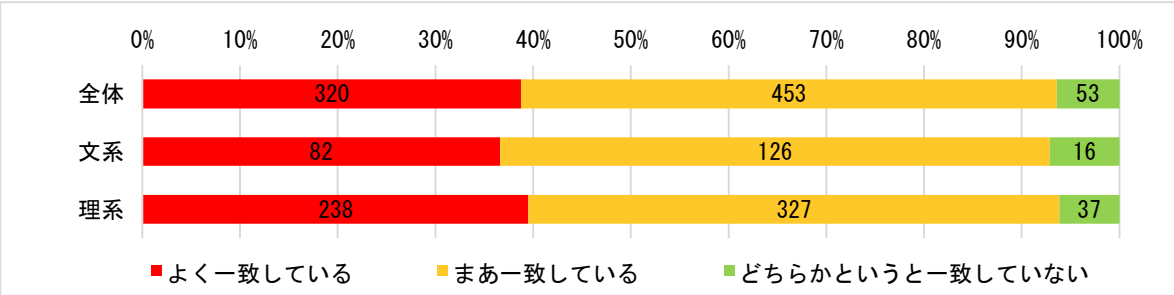
Q.06　現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。
①よく一致している　②まあ一致している　③どちらかというと一致していない
④あまり一致していない

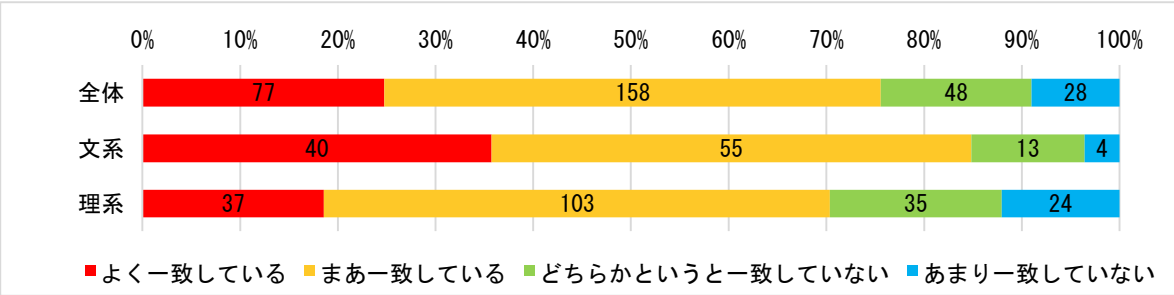
＜図 5　希望分野と専門分野の一致度・入試区分別＞



1 年間の学習経験と大学生活を経て、自らの希望分野とこれから学ぼうとする専門分野との一致度について学生がどのように思っているか、を尋ねた。この段階で「どちらかというと一致していない」、「あまり一致していない」は好ましくない回答である。一般入試の文系・理系ともその比率は 15％以下にとどまり（昨年はそれぞれ 8%、12%）、大半の学生が「よく一致している」、「まあ一致している」と回答していることは良い結果といえる。

＜図 6　上：希望分野が「変わっていない」と回答した学生、下：「変わった」と回答した学生＞





次に、Q.05 で希望分野が「変わっていない」と「変わった」と答えた学生の区分について、一致度の解析を行った。「変わっていない」と答えた学生の専門一致度は高く、90％を超えている。一方、「変わった」と答えた学生の区分では「（よく・まあ）一致している」の回答が文系 85%、理系 71％であることから、より一致度が良くなる方向に学生の意識が変化していることを示している。ただし、希望分野が変わっていないと答えた学生の約 5%、変わったと答えた学生の約 25%が（どちらかというと・あまり）一致していないと回答している点は気がかりな点である。

４．学習意欲

Q.07～Q.11　入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の５つから選択してください。なお、この質問は Q.7～Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。

Q.07　＜入学当初の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

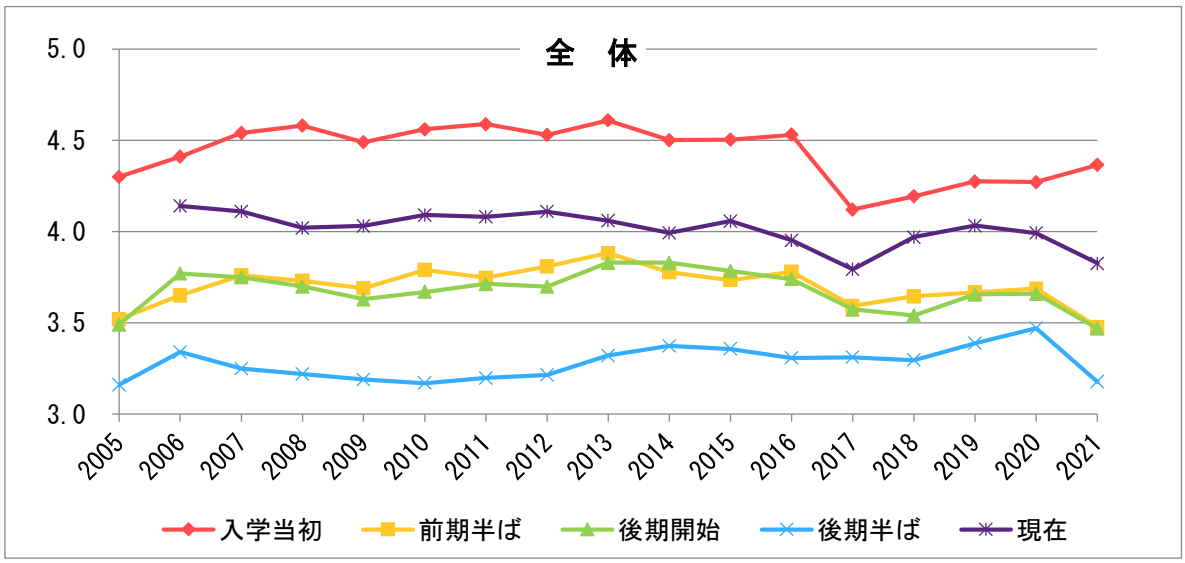
Q.08＜前期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

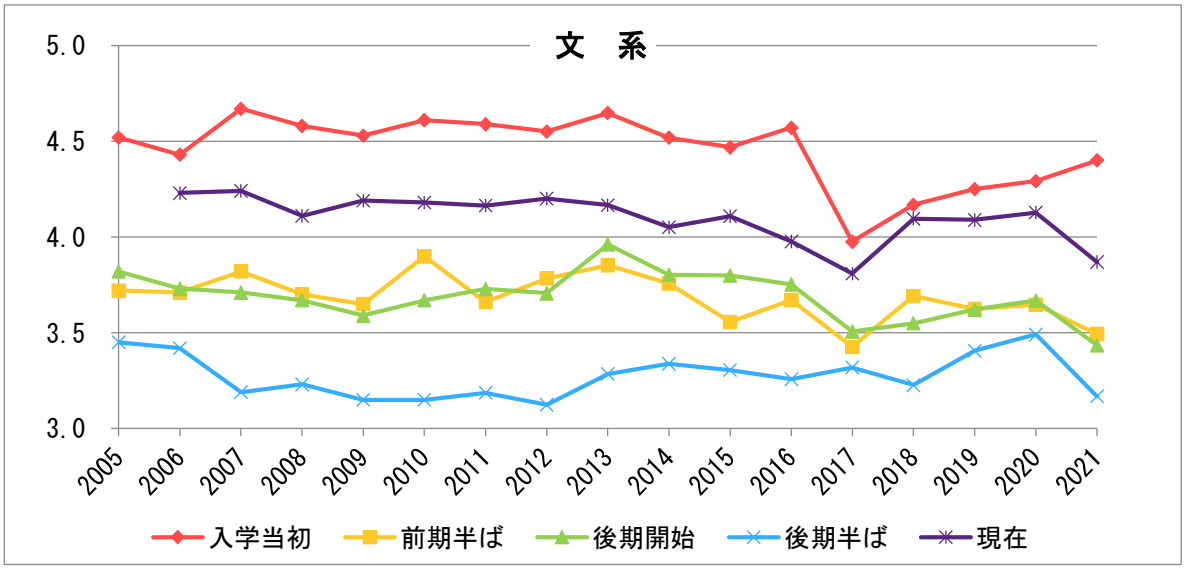
Q.09＜後期開始の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

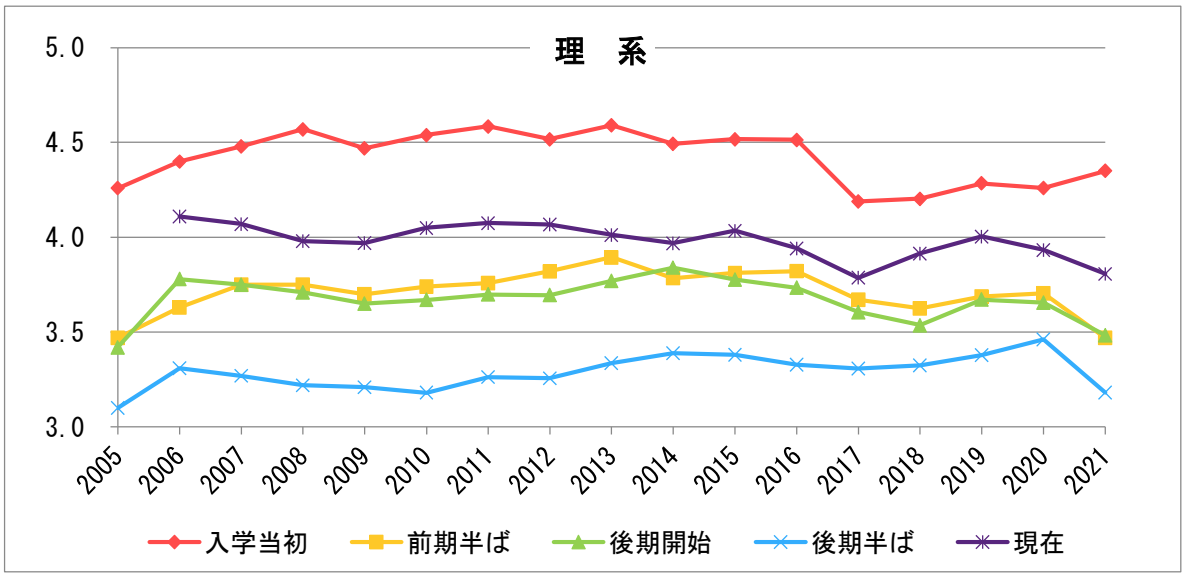
Q.10＜後期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11＜現在＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

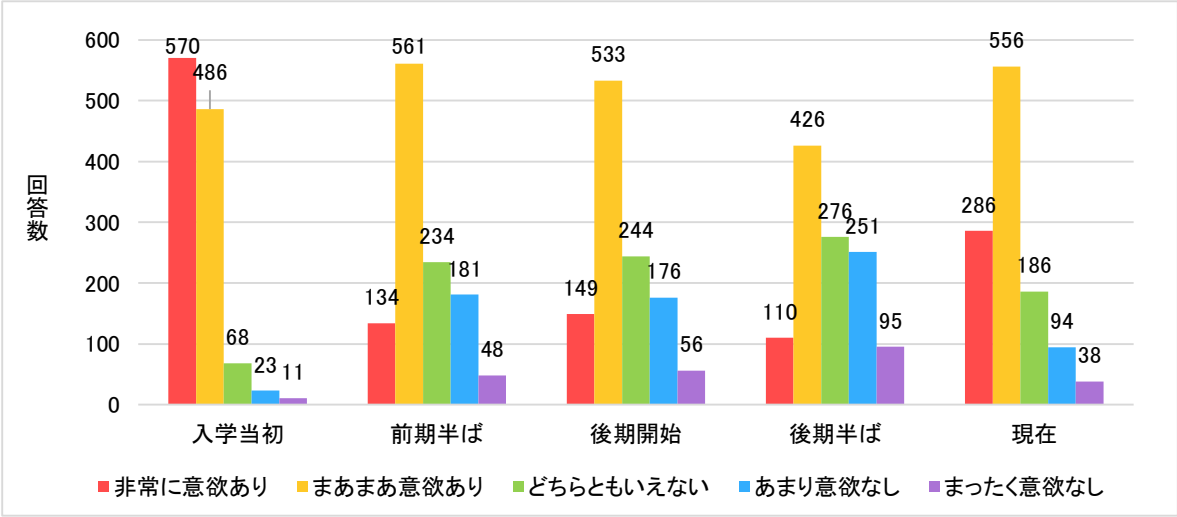
＜図７　学習意欲の経年変化（2005-2021 年）＞







＜図 8　学習意欲の変化　回答分布（2021 年：全体）＞



学習意欲については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。経年変化を見るために、学習意欲を数値化した（「①非常に意欲あり」を 5、最後の「⑤まったく意欲なし」を 1 とした）平均点を各時期（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）についてプロットした。なお、本アンケートは主に 4 月の回答なので、コロナ感染対策によるオンライン授業の影響は 2021 年回答の前期半ば以降に含まれていると思われる。

図 7 に示したように、入学当初の高い学習意欲から、次第に低下して後期半ばで底になり、2 回生新学期で回復するという傾向は長年同じである。しかし、文系、理系ともに昨年までと比較して今年はその数値が 0.2～0.3 ほど低下している。前期半ばから現在までの 4 時期において、2006 年以降でほとんどが最低値となっており、コロナ禍のオンライン授業の影響が大きかったと考えられる。図 8 において、赤の「非常に意欲あり」が前期半ばで激減するのは致し方ないとしても、青・紫の「あまり意欲なし」「まったく意欲なし」がともに時間を追って増加するのは嘆かわしい傾向である。

（注）2017 年度調査で入学当初の意欲値が以前より大きく低下した理由は、それまでは学生が回答するに当たり自身が入学時に記入した抱負や期待を読む欄を設けていたので回想効果があったが、2017 年度よりこれを廃止したためと思われる。

＜図 9　学習意欲の変化・全体比率　上：2020 年度、下 2021 年度＞

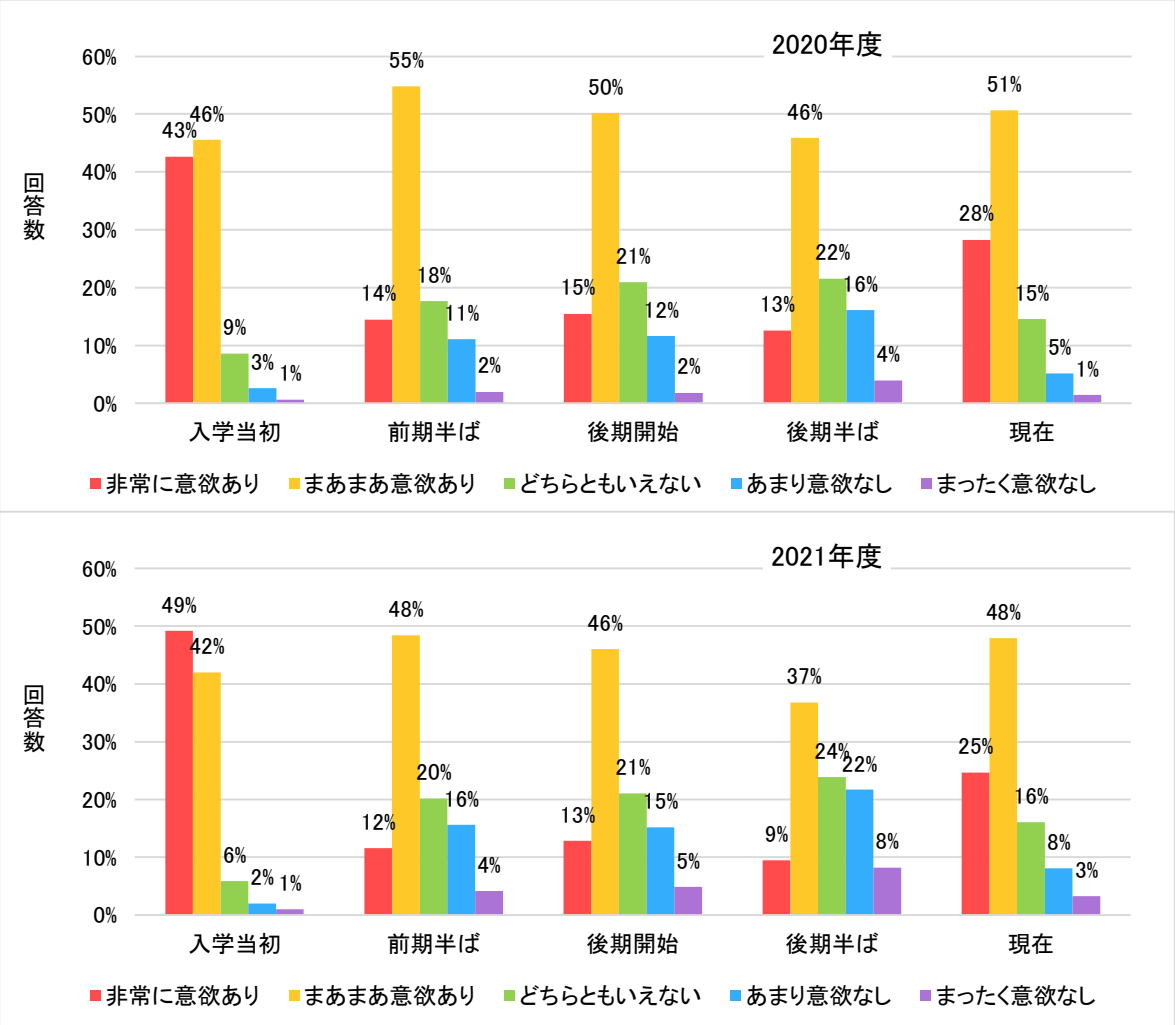
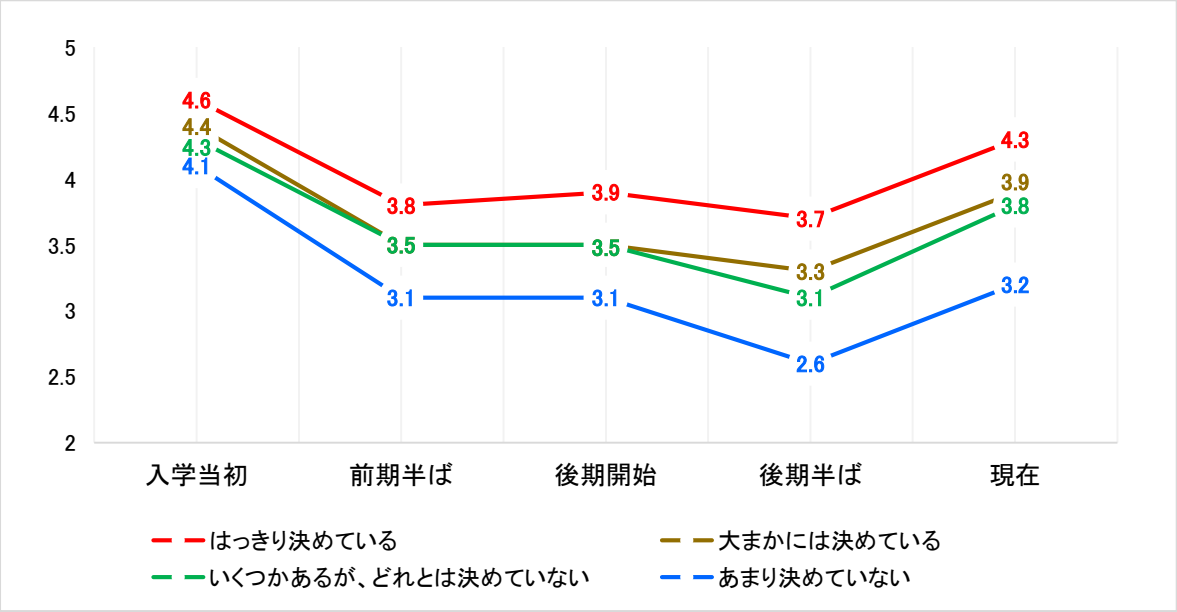


図 9 は昨年の意欲分布と今年の分布を比較して表示している。全体的には、入学当初の高い学習意欲が次第に低下して後期半ばで底になり、2 回生新学期で回復するという傾向を、毎年繰り返している。1 回生での意欲低下をいかに防ぎ、 2 回生につなぐことができるかが引き続き大きな課題である。

図 9 はまた、コロナ感染対策によるオンライン授業の影響のない 2020 年度と影響の出た 2021 年度の対比となっている。前期半ばから現在までの 4 期全てで、「あまり意欲なし」「全く意欲なし」が増えていること、数％程度の割合であるが 4 期全てで「全く意欲なし」が倍増していること、など注意しておく必要がある。

＜図 10　学習意欲の変化　志望意識別＞



＜図 11　学習意欲の変化　一致度別＞

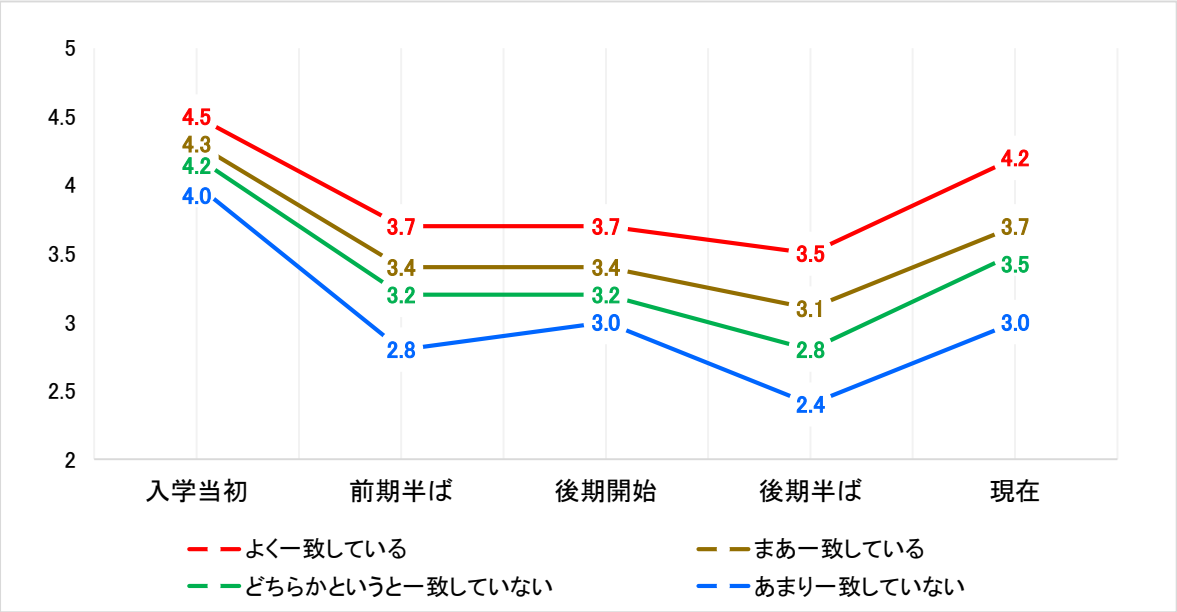


図 10 は Q.04 志望意識の回答群別に、学期ごとの学習意欲を数値化した（「①非常に意欲あり」を 5、最後の「⑤まったく意欲なし」を 1 とした）平均値を図にしたものであり、図 11 は同様に Q.06 一致度の回答群別に学習意欲を数値化し、学期ごとの経過を図示したものである。志望意識の有無、および希望分野と専門分野の一致度が、学生の学習意欲にどの程度の影響を与えているかを検討するためである。

これらの図から入学後のどの時期においても、志望意識の有無により学習意欲に明確な差がでていることが分かる。一致度の良否においても学習意欲の差は明白である。予想されたように、学生が抱くこの二つ意識が、極めて明瞭に、入学後の学習意欲に大きな影響を与えている。

志望意識や一致度が低い場合は、学習に対して「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」の比率が大きくなり、学期ごとの意欲低下が著しい。入学当初においても各回答群ですでに差がある（4.0~4.6）が、１年が経過して 2 回生になっても回復力が弱く、各回答群で大きな差のまま（3.0~4.3）残っている。先に懸念したように、志望 → 学習意欲 の悪循環を示す結果である。後述するように、学習意欲の低下は大学生活全般に波及することであり、今後とも注視して対策を講じていく必要がある。

５．大学教育での向上感

入学後１年間の大学での学習を経て、学生が自己能力の向上についてどのような意識をもっているかをいくつかの要素能力について質問した。ここでは、「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」、「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」、「専門分野で基礎となる学力」、「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」、「自ら考え、主体的に行動する能力」、「英語の能力」の６つの能力について Q.12～Q.17 で尋ねた。これらは多くの学部のカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する項目であることから、学生が卒業するまでに「専門知識の向上」を含めて高い向上感を得られることが、教育効果の検証として重要となる。

Q.12　入学後 1 年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.13　１年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

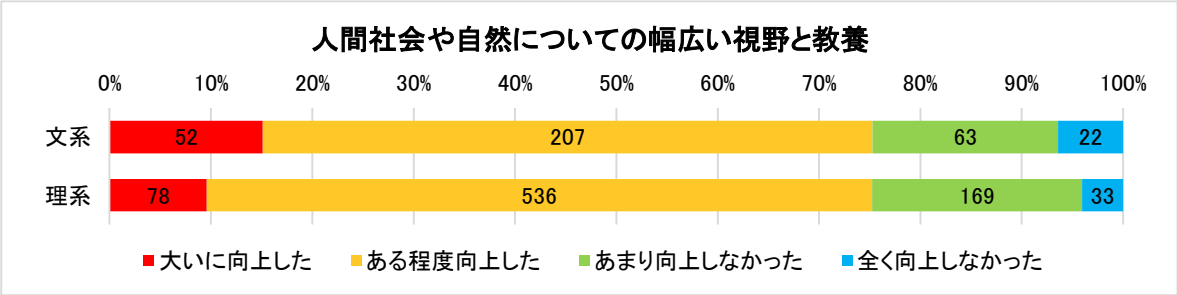
Q.14　あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

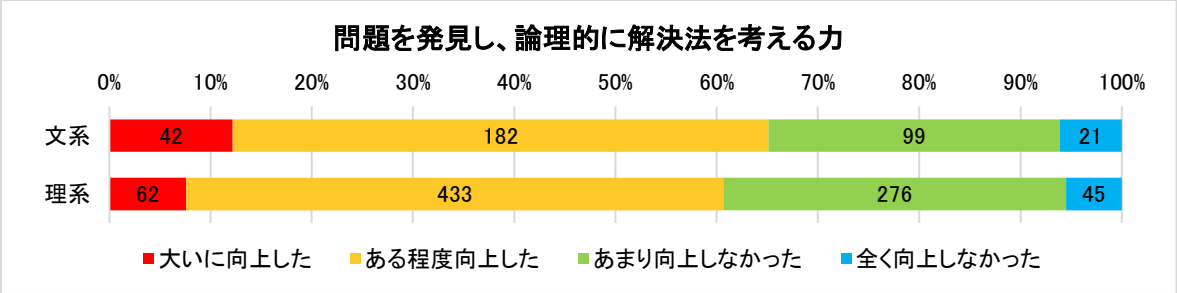
Q.15　１年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

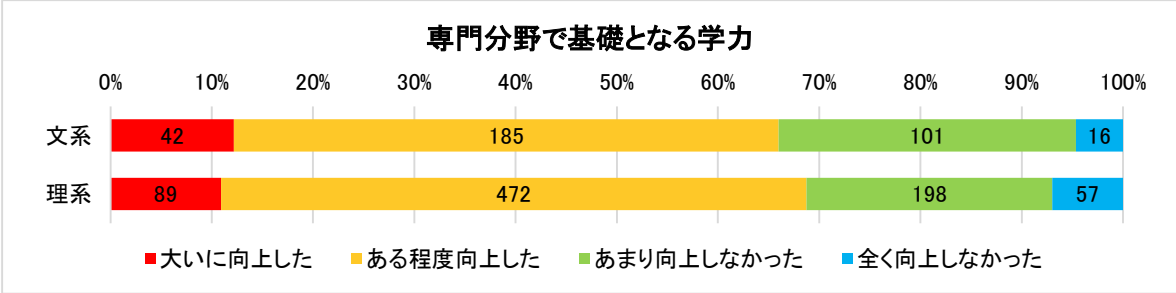
Q.16　１年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

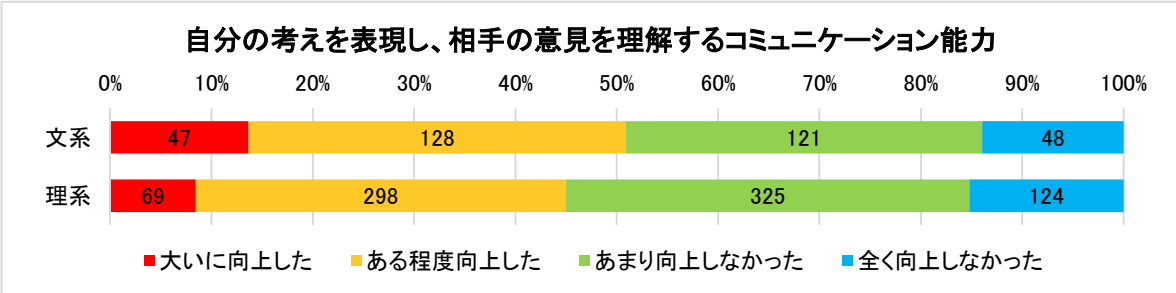
Q.17　１年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第１外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

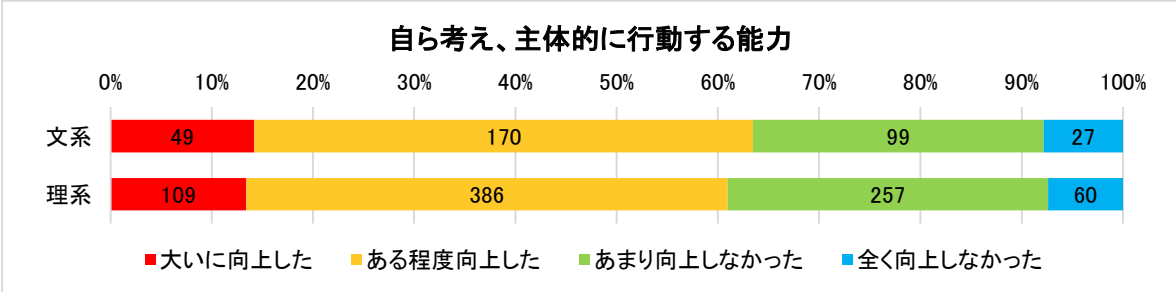
＜図 12　大学教育での向上感　各要素別＞











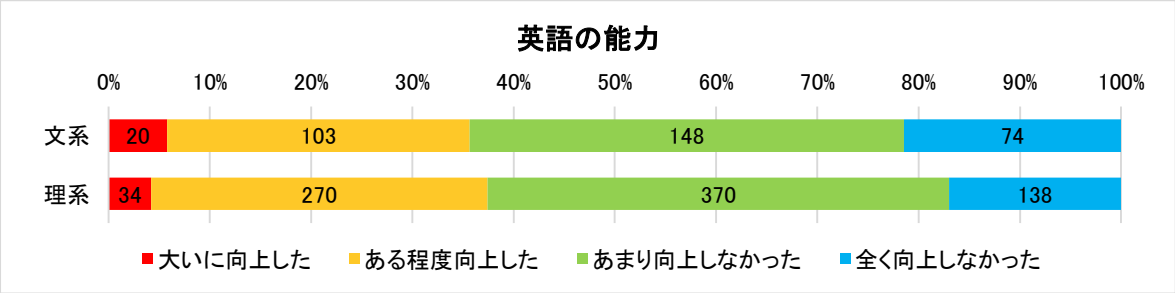


図 12 は各要素能力についての回答比率を図示している。「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見と、「あまり向上しなかった」、「全く向上しなかった」の否定的意見の比率に着目すると、文系と理系で大差なく、全体では肯定的意見が一昨年から 3 年間で次のように推移した：

「人間社会や自然についての幅広い視野と教養」：78％→82％→75％

「問題を発見し、論理的に解決法を考える力」：68％→69％→62％

「専門分野で基礎となる学力」：70％→69％→68％

「自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力」： 62％→69％→47％

「自ら考え、主体的に行動する能力」： 76％→75％→62％

「英語の能力」：37%→44％→37％

教養・共通教育としては、「幅広い視野と教養」と「主体的に行動する能力」の向上感が高いことは良い結果であり、今年も前者が 75%と高かったことは好ましい。ただし、今年度はコロナ禍の影響も加わっているはずであり、「コミュニケーション能力」と「主体的に行動する能力」の各比率が 2 割と 1 割以上の減になっている点は今後注視していく必要がある。

2016 年度入学生から E 科目制度を導入して英語改革を進めているにも関わらず、「英語能力」についての向上感は 40%以下となっている。もっとも、2018 年以降の推移は、28%→37％→44％→37％であり、コロナ禍という負の要因を考えるとここ数年の明るい兆候と言えるかもしれない。今後とも授業改善のみならず、英語への関心や英語に触れる機会を増加させて向上感・達成感が得られる仕組みをさらに検討することが必要である。

2017 年度卒業生から卒業時アンケート（3 月実施）において、全学共通教育についての意識を問う設問を加えていただいた。これにより入学時の期待度からスタートし、2 回生進級時の実現度、満足度、そして大学生活 4 年間の総括としての全学共通教育の効果に関する意識をシリーズで観察できるようになった。

以下に卒業時アンケートから全学共通教育での学習に関する 5 項目についての調査結果を転記した。

【参考資料】2020 年度卒業生進路調査アンケート結果より転載

全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べて以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか。

（１）専門以外の幅広い知識・教養

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

（２）専門分野で基礎となる学力

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

（３）英語の能力（英語以外の言語を第１外国語とする人はその言語能力）

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

（４）初修外国語の能力（外国人留学生については日本語の能力）

①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

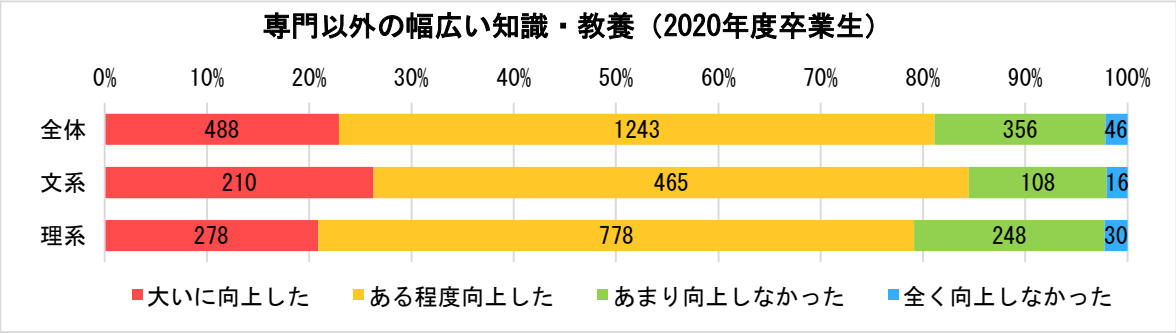
⑤初修外国語は修得しなかった

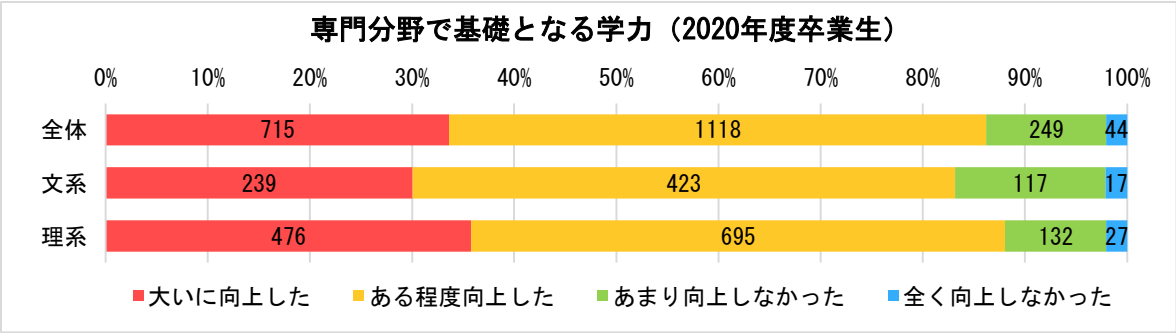
（５）将来の研究分野や進路を決める手がかり

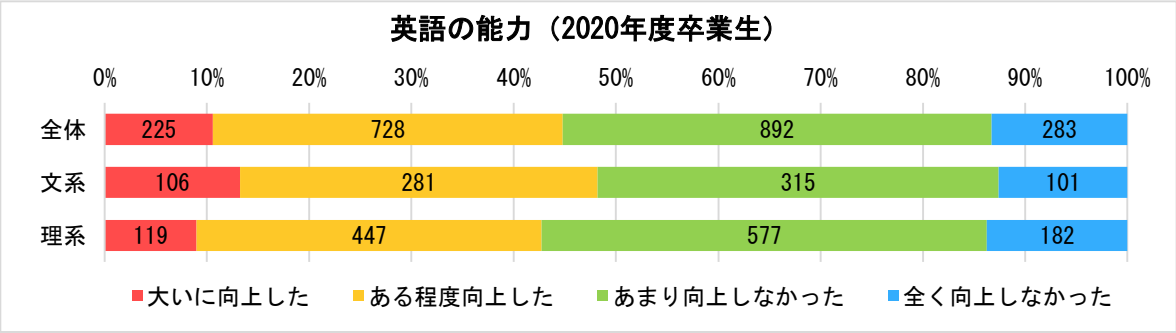
①大いに得られた　②ある程度得られた　③あまり得られなかった　④全く得られなかった

※医（医）は設問なし

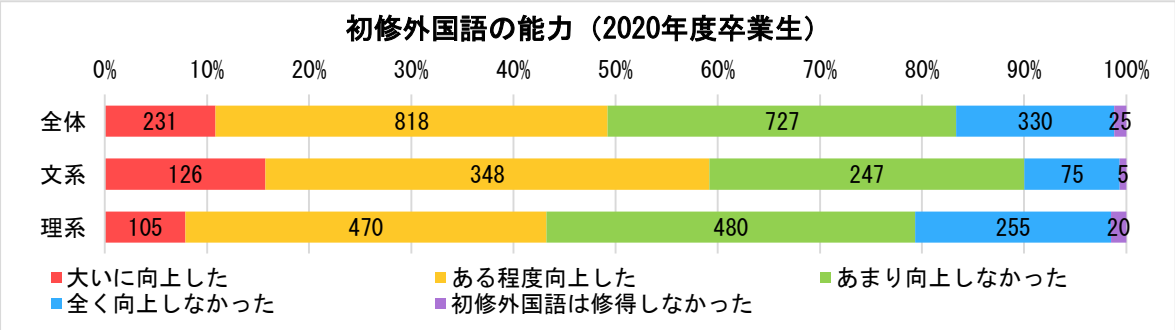
＜図 13　卒業生進路調査アンケート結果（要素別）　全共分抜粋＞



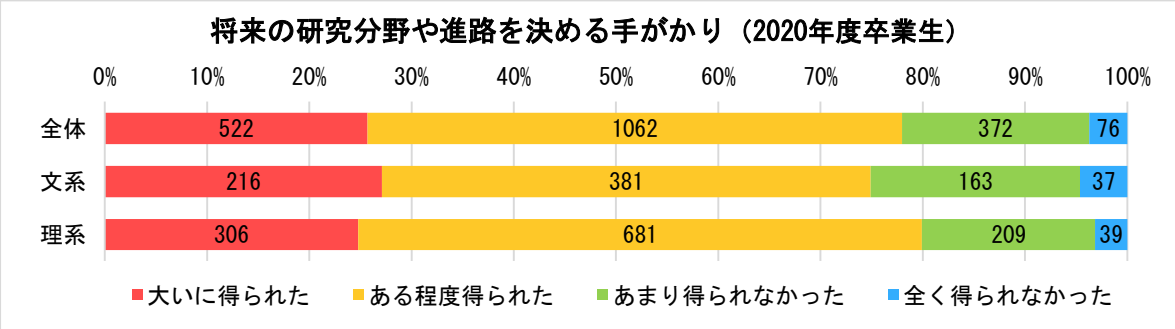




＊英語以外の言語を第１外国語とした方は、その言語の能力



＊＊外国人留学生については日本語の能力



＊医（医）は設問なし

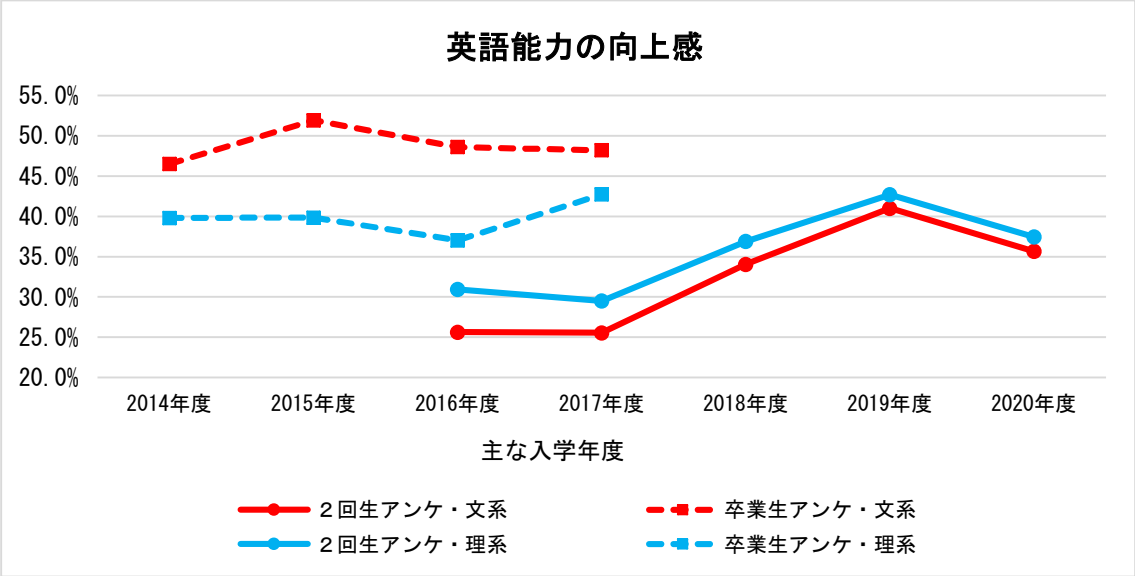
この中で、（１）専門以外の幅広い知識・教養、（２）専門分野で基礎となる学力、（３）英語の能力の３項目は、２回生進級時アンケートと共通であることから、回生による向上感の変化をみることができる。ただし、2021 年３月在籍の４回生（主として 2017 年度入学生）と、2021 年５月在籍の２回生（主として 2019 年度入学生）の意見であることから、ほぼ同一のカリキュラムで教育を受けた学生群の意見変化ではあるが、同一群の３年間（２回生→４回生）の意見変化を示すものではない。

概観すると（１）幅広い知識・教養では、２回生では「大いに向上した」、「ある程度向上した」の肯定的意見がほぼ 75％である。４回生では文系学部で約１割の伸びが見られるものの理系学部では回生による変化はあまりない。しかし（２）専門分野の基礎学力では２回生時の肯定的意見が 70％以下であるのに対して、４回生では 80％以上、理系では 90％ちかい肯定的意見となっており、学部専門教育を修了した段階の方が基礎教育の意義をより自覚できるのではないかと思われる。

（３）の英語能力では、卒業時でも肯定的意見が 45％前後と、他の調査項目と比較して低くなっている。しかし 2 回生進級時点の結果と比較すると、文系では顕著に向上感が上昇して 50％程度に達していることが特徴的である。正確な理由は不明であるが、文系では 2 回生以降においても外国語教育への配当単位が多く、英語教育を受ける機会が多いためではないか、と推測される。ほぼゼロからスタートする初修外国語のグラフでも、文系と理系のカリキュラムの差が向上感の差となって明確に表れている。

◇英語の能力の向上感について、2 回生進級時アンケートと卒業生アンケートを比較

＜図 14　英語能力の向上感＞



毎年のアンケート結果を継続して表示するため、図 14 に、回答者の主な入学年度を横軸にして、文系と理系の英語能力の向上感（肯定的意見の％）の経年変化を示した。実線で示した 2 回生進級時アンケートで顕著なことは、前述したように、ここ数年の英語能力の向上感の増加である。文系（赤）も理系（青）も 2016 年度 2017 年度と比較して、2018 年度 2019 年度と向上感が増加している。（今回の 5%程度の減少がコロナ禍の影響をどれだけ受けているかについては、今後の推移を継続して見守る必要がある。）本学では、英語教育の充実を目指し 2016 年に E 科目制度を主とした英語教育改革を実施した。今後も E 科目制度の改革改善を進めていく中で、学生の向上感にどのような変化が現れるかを注視していきたい。

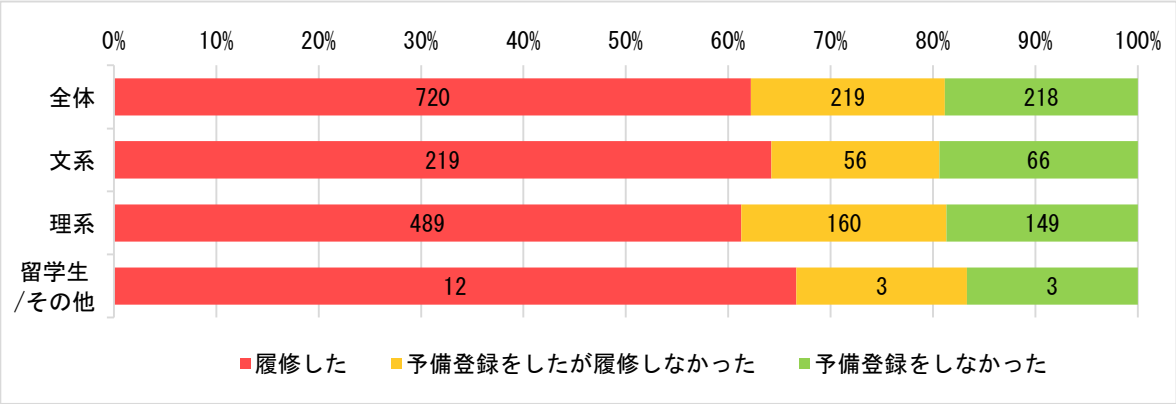
もう一つ特徴的なことは、点線で示した 4 回生卒業時アンケートでの向上感が 2 回生進級時よりさらに伸びていることである。2016 年度と 2017 年度の入学生に対して 2 回生進級時と卒業時のデータを取得することができたので、2 年度分の同一学生群について 3 年後の向上感の増加を実線と破線の対比として見ることができるようになった。文系理系ともに向上感が増しており、特に文系では 2 回生進級時に肯定的割合が 25%程度であったのがほぼ倍増している。また、理系でも約 30％から 40％前後に伸びている。この傾向が継続的なものか、もう数年経過すれば同一群の意見変化を経年変化として読み取ることができるはずである。

6．ILAS セミナー・実習・実験科目の受講

1998 年度に始まる新入生向け少人数セミナー（通称：ポケット・ゼミ）は、開始以来開講数が大幅に拡大して現在の ILAS セミナーに至っている。ILAS セミナーは、主に新入生を対象に、「ILAS セミナー」、「ILAS Seminar-E2」、「ILAS セミナー（海外）」の 3 種類が開講されている。各学部・研究科・研究所・センター等の教員が、Face to Face の親密な人間関係の中で、様々なテーマを扱った少人数ゼミナール形式の授業として企画され、入学当初の重要な初年次教育と位置づけられている。2021 年度前期においては 238 科目が開設され、受講定員 2,665 名、受講申し込み者数 2,519 名、受講許可者数 2,165 名であった。科目数、受講定員、申し込み者数、受講許可者数は昨年度とほぼ同じであった。入学者（2,912 名）に対する受講申し込み率、申し込み者に対する受講決定率は 86～88%前後で推移しており、結果として入学者に対する受講許可率は約 75%となっている。その理由を調査して今後の改善策を検討することが目的である。

Q.18　1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。
①履修した　②予備登録をしたが履修しなかった　③予備登録をしなかった

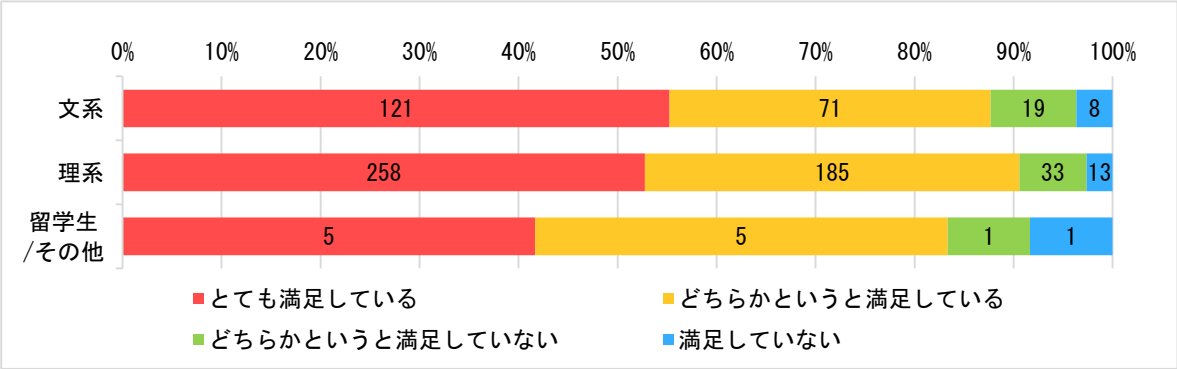
＜図 15　ILAS セミナーの受講＞



Q.18 では、受講の有無を尋ねた。「ILAS セミナー」では少人数ゼミという性格上、最小 5 名から最大 15 名までの定員を設けている。2019 年度から第 5 希望まで（それまでは第 3 希望まで）の予備登録を可能にして、抽選により履修許可を出している。その結果として、一昨年は「履修した」の比率が全体で 5 point 程度（65%→70%）増えたが、残念ながら昨年今年は減少が続き（70%→65%→62%）以前と同じレベルになった。また全体の 19%が予備登録そのものをしなかった。文系と理系を比較すると、今年は特に文系の履修率が低くなり過去三年間で、文系：74%→72%→64%、理系：69%→62%→62%という結果であった。その理由については Q.20 で問うことにする。

Q.19　Q.18 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。
①とても満足している　②どちらかというと満足している　③どちらかというと満足していない
④満足していない

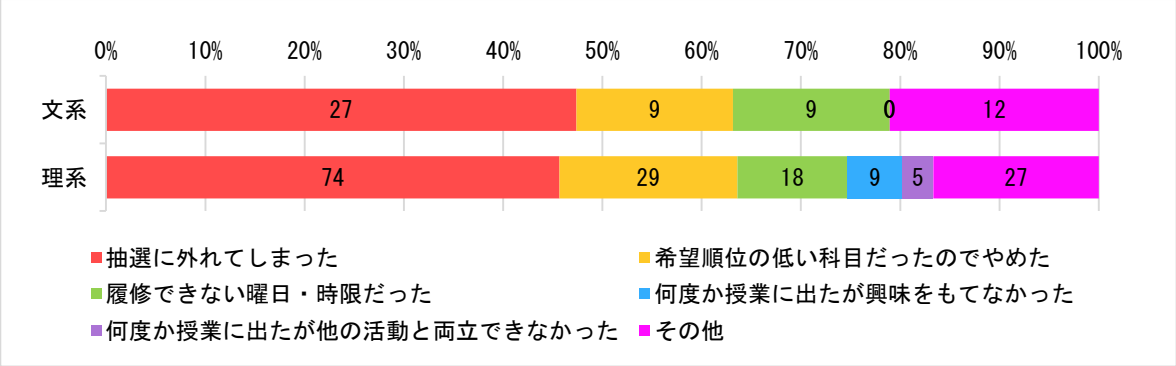
＜図 16　ILAS セミナー履修者の満足度＞



Q.19 では、ILAS セミナーを履修した学生の満足度を尋ねた。図 16 に示したように、「とても満足」と「どちらかというと満足」を合わせると 90%前後の学生が学習内容に満足しており、（少なくとも現在のアンケート形式となった 2017 年より）ずっと高い水準で推移している。

Q.20　Q.18 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。
①抽選に外れてしまった　②希望順位の低い科目だったのでやめた　③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった　⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（記述回答）

＜図 17　ILAS セミナー：予備登録したが履修しなかった理由＞



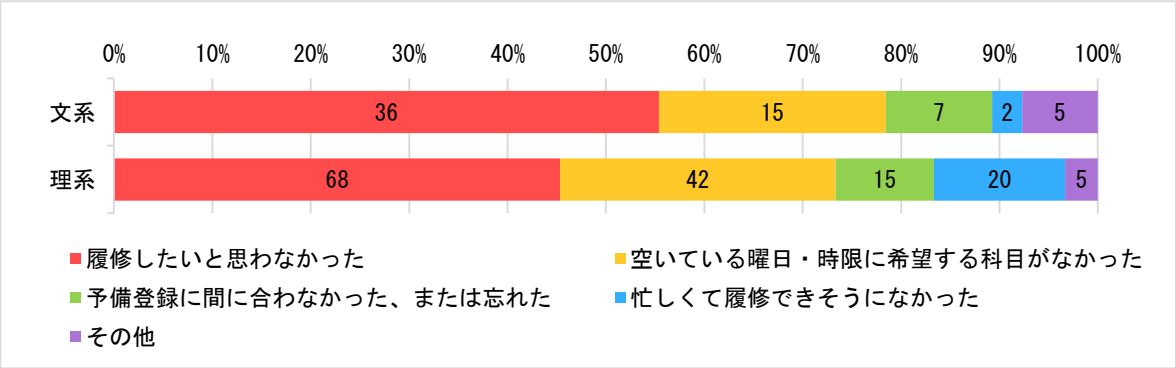
この設問で「予備登録をしたが履修しなかった」理由を問うた。回答数が限られるため、年々の変動が大きい結果となっている。今年は「抽選に外れてしまった」が理由としてもっとも多く、半数近くに及ぶ。昨年は「何度か授業に出たが興味をもてなかった」が文系の一位、理系の二位の理由であったが、今年はそれぞれ 0%、5%に激減している。

抽選外れを防ぐ方策としては、すでに予備登録の希望候補を 3 科目から 5 科目に増やしたが、次の方

策として、許可者の履修登録率が約 80%であることを考慮して許可者を定員＋１名程度にすること、人気は高いが定員が少ない ILAS セミナーの定員を若干増やすこと等、担当教員のご理解を得て実質的な定員増を図ることが考えられる。

Q.21　Q.18 で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。
①履修したいと思わなかった　②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた　④忙しくて履修できそうになかった
⑤その他（記述回答）

＜図 18　ILAS セミナー：予備登録をしなかった理由＞



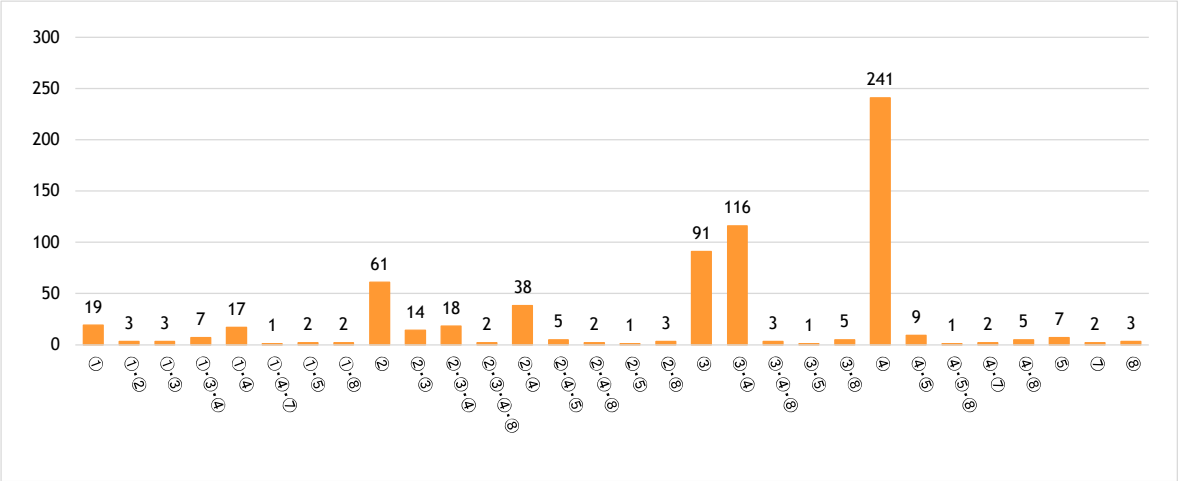
「予備登録をしなかった」学生に理由を尋ねた。やはり回答数が限られているが、毎年ある程度似た結果となっている。結果は、「履修したいと思わなかった」が約半数あり「空いている曜日・時限に希望する科目がなかった」の回答を加えると 70%以上になる。Q.18 で予備登録をしなかった学生の比率が全体の 19%であったことを考慮すると、回答者の約 9%はもともと「履修したいと思わなかった」と回答しており、ILAS セミナーそのものに興味をもっていないことになる。

また最近、担当教員の退職等もあり ILAS セミナーの開講科目数が少なくとも過去 5 年間は減少傾向（277→267→265→237→238 科目）にあることから、各部局への協力依頼を積極的に行い、魅力的なテーマの ILAS セミナーを継続的にご提供いただく必要があるように思われる。

Q.22　スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・II・III、地球科学実験のうち、１回生で履修した科目の□欄チェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。

①スポーツ実習 IA　　②スポーツ実習 IB　　③物理学実験　　④基礎化学実験
⑤生物学実習 I　　⑥生物学実習 II　　⑦生物学実習 III　　⑧地球科学実験

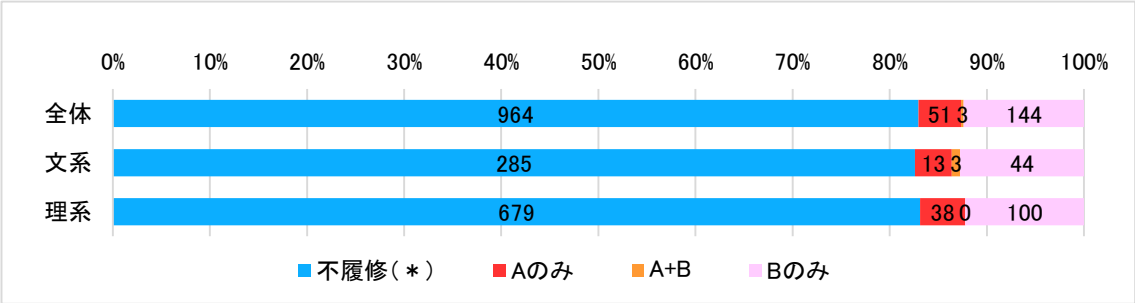
＜図 19　回答数と履修した科目の組み合わせ＞



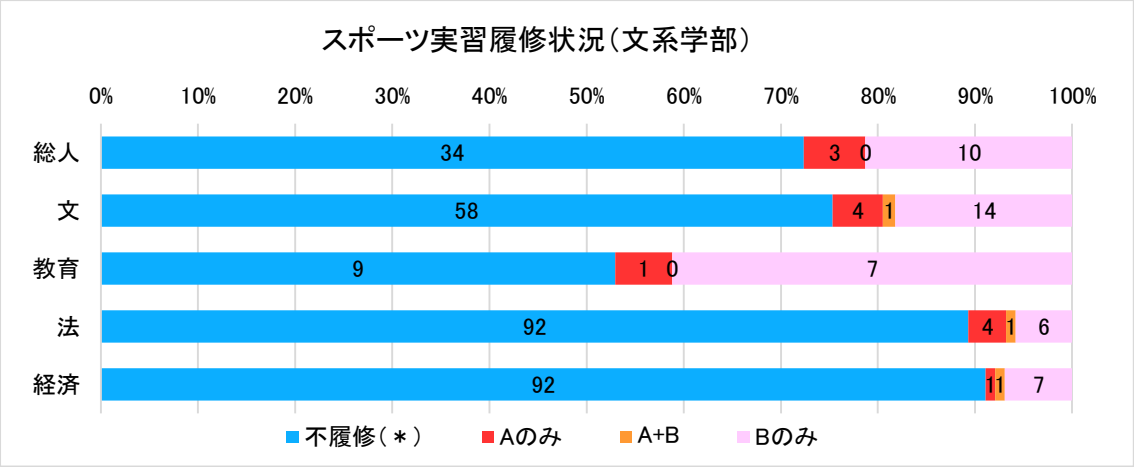
＊①スポーツ実習 IA は令和 2 年度不開講
＊＊参考：いずれもチェックなし　478 名

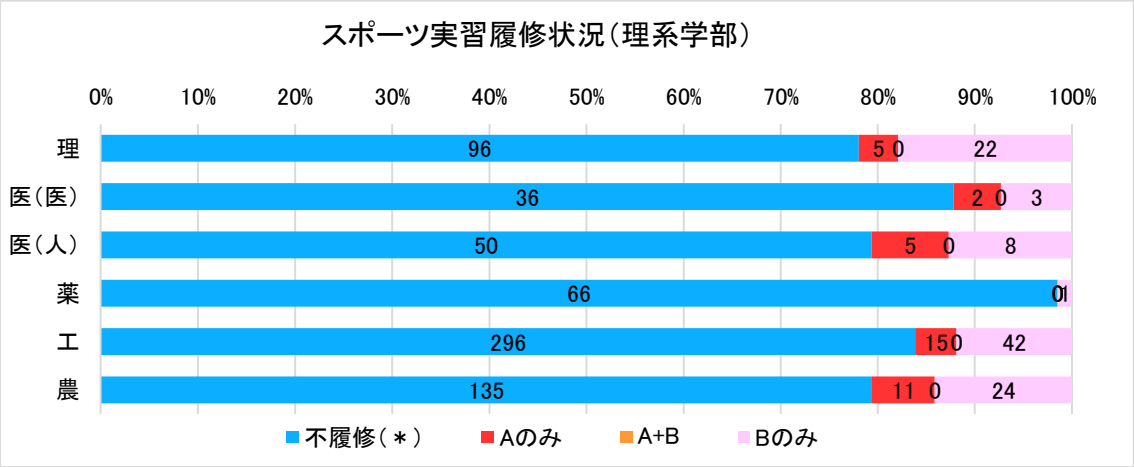
Q.22 では、いわゆる 1 単位科目の履修状況を尋ねた。スポーツ実習と理系の実験科目が該当する。それぞれの科目の意義は明確に設定されているが、その意義とは無関係に、学習時間やコマ数の割に単位が少ないという理由で、履修を敬遠するという傾向にある。その実態を調べることが本設問の目的である。

＜図 20　スポーツ実習履修状況＞



＜図 21　スポーツ実習履修率（上：文系学部、下：理系学部）＞





（＊1）「A のみ」には「スポーツ実習 IA」に加え実験・実習科目をチェックしている学生も含む。「B のみ」「A+B」も同様。

（＊2）「不履修」は本設問にてスポーツ実習にチェックを入れていない、もしくは本設問の科目はいずれも履修していない場合とする。

図 20 で全体平均を見ると、80％以上の学生がスポーツ実習を履修していない。少なくとも 2018 年から昨年までは 60％前後で変動していた（61％→69％→59％）が、今年はコロナ禍の影響が表れたと思われる。これまでは、必須ではない 1 単位科目を避けて効率的に単位を取得しようという傾向として認識されてきた実習・実験科目である。

図 21 のように、スポーツ実習履修状況は学部により大きな差があるが、その傾向のある部分はコロナ禍以前と変わらないところもある。不履修が多い学部は、文系では法学、経済、理系では、薬学、医医であり、一方、少ない学部は、文系では教育、理系では理、農となっている。このようなコロナ禍に依存しないところは、各学部のクラス指定の有無やカリキュラムにより現れる差に依るとも考えられる。

また Q.35 で後述するように、30~40％の学生は 1 週間を通してほとんど運動をしていないという事実は、多くの学生が 18～19 才の若者として健康的とは言えない学生生活を送っていることを示している。

次に、理系の実験科目について結果を述べる。まず参考資料は、2017 年度～2021 年度（前期）の実験科目履修者数であり、実験科目全体の実施規模を概観できる。

◆参考資料

＜表 3　実験・実習科目の登録者数＞

（履修取消前の数値、カッコ内は取消者数、院生・非正規生を除く）

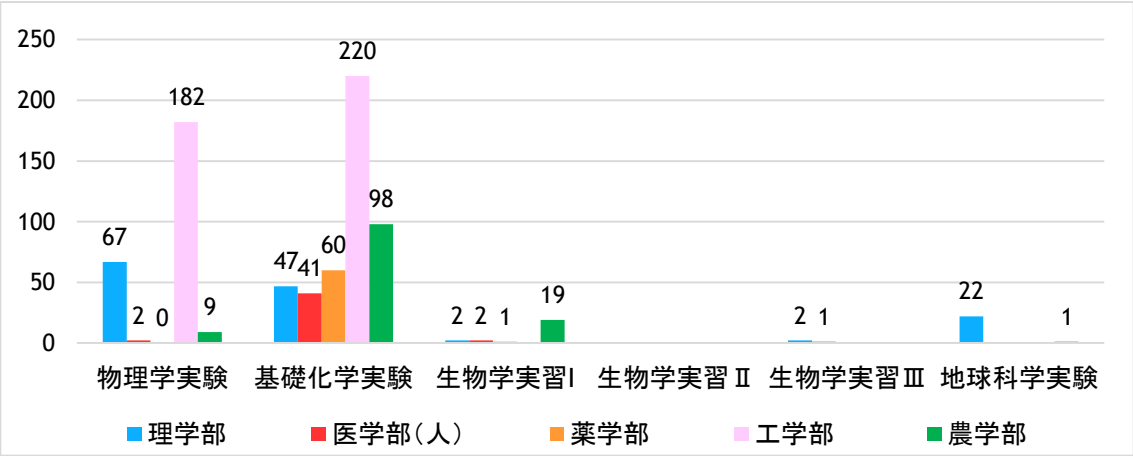
科目名	2021（前期）	2020（全体）	2019（全体）	2018(全体)	2017(全体)
物理学実験	319（11）	766（41）	603（80）	510（47）	598（74）
Elementary Experimental Physics-E2	–	14（2）	11（2）	7（1）	7
基礎化学実験	526（8）	1021（21）	881（28）	724（10）	738（15）
Fundamental Chemical Experiments-E2	34	76（1）	96（1）	48	48
生物学実習I	81（2）	86（6）	114（2）	139（3）	111（4）
生物学実習Ⅱ	13	19（1）	30	32	19
生物学実習Ⅲ	19	28（2）	26（3）	50	45
地球科学実験	49（1）	99（10）	85（4）	53	69（4）

今年は、前期のみのデータであり、コロナ禍の影響も含めて、各科目の変動について認識・議論することができない。引き続きデータ収集を継続する必要がある。

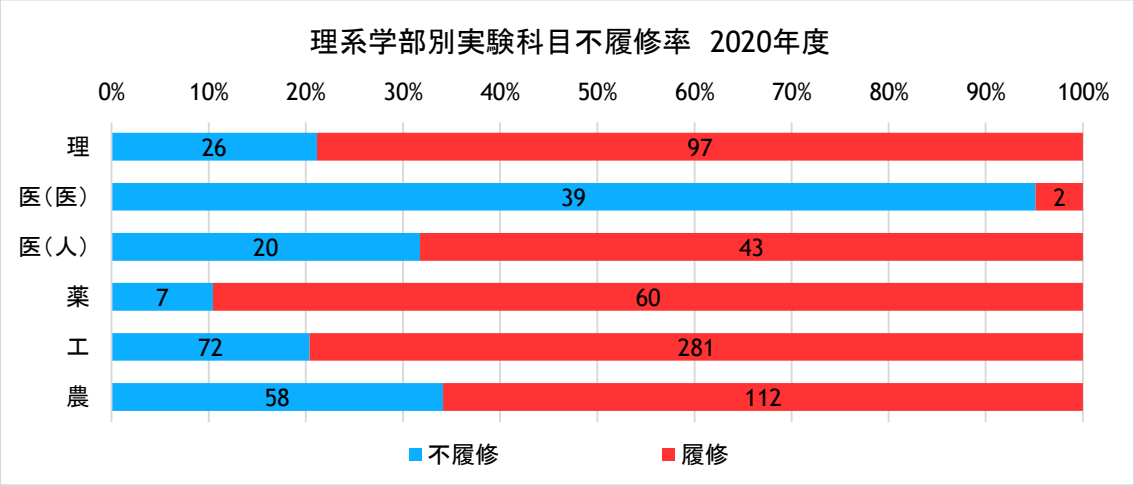
生物学実習を除いて、2019 年度に実験科目の履修者数が増加傾向に転じ、その傾向が 2020 年度も続いている。各学科のガイダンス等で実験科目の重要性を強調していただいた効果と思われる。生物学実習 I・II では履修者の減少が続くが、これは医医で選択必修が外れた影響が現れたものと考えられる。先に述べたコストパーフォーマンスが悪いという学生意識が履修者減少を招かないように、各学部では分野の特性に応じた履修指導を継続的に行う必要があるだろう。

図 22 は、実験科目を 2020 年度に履修した理系学生の回答数を学部別、実験別に示したものである。一目して分かるように、物理学実験は理と工の学生が履修し、基礎化学実験は全ての理系学部の学生、生物学実習は農の学生、地球科学実験は理の学生が履修するという結果である。

＜図 22　理系学部別実験履修者数＞



＜図 23　理系学部別実験科目不履修率　上：2020 年度、下：2019 年度＞



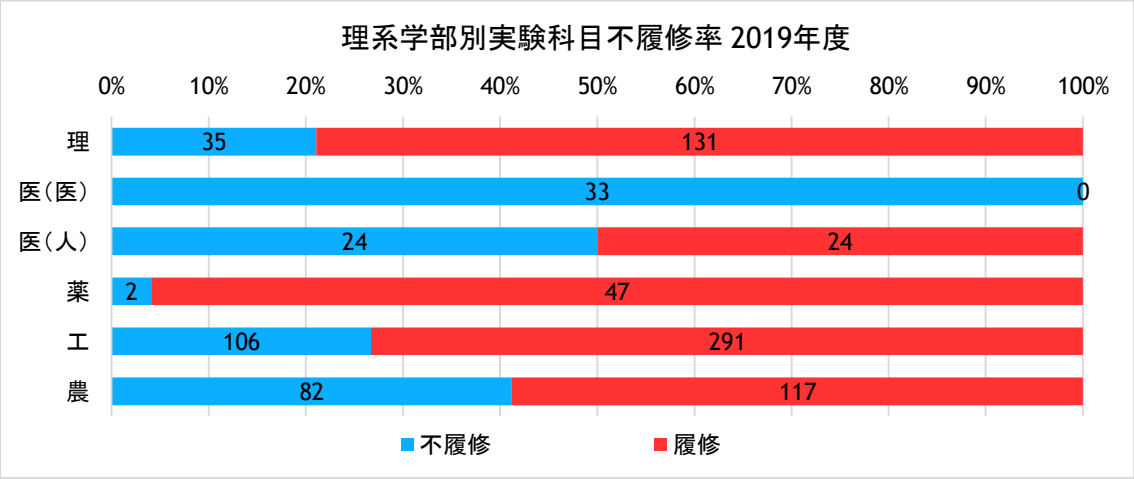
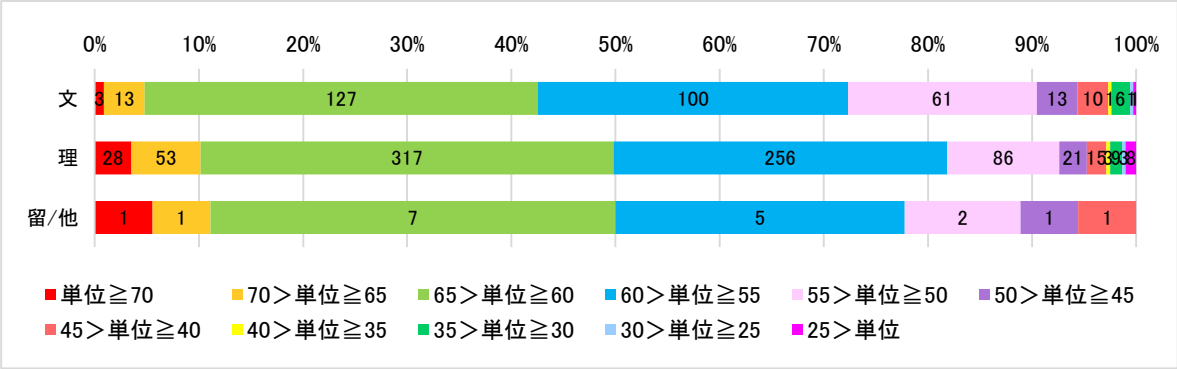


図 23 は、理系の学部別に 1 科目も実験・実習を履修していない学生の割合を青色で図示している（過去 2 年分）。傾向は昨年と類似しているが、医医では 2019 年度より選択必修が外されたことにより履修者はほぼゼロになった（過去 3 年間で 62%→0%→5%）。一方、学生数の多い工学と農学では履修率が改善してきている（工：67%→73%→79%、農：52%→59%→66%）。今年履修していない学生の割合が増えたのは薬学だけであり、実験実習に関してはコロナ禍の影響による不履修率の増加はあったとしてもごく限定的であったと言える。学部教育として実験科目のクラス指定を明確にされた効果やガイダンスでの履修指導の効果である。しかし、工学、農学のように必修または選択必修であっても不思議でない理系学部で、まだ多くの学生が実験科目を履修していないのは驚きである。もし単位取得効率でこのような傾向が助長されているとするならば、嘆かわしい結果である。なお、文系学生の実験科目履修はごく僅かであったことから、上記の考察より除外した。

7．履修動向と成績

Q.23　あなたは 1 回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1 回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。
①単位≧70　②70>単位≧65　③65>単位≧60　④60>単位≧55　⑤55>単位≧50　⑥50>単位≧45
⑦45>単位≧40　⑧40>単位≧35　⑨35>単位≧30　⑩30＞単位≧25　⑪25＞単位

＜図 24　取得単位＞



単位の実質化の議論において、授業時間ならびに予習・復習・課題等に要する授業外学習時間を十分に確保することが重要である。大学設置基準では 2 単位授業 1 コマにつき 4 時間の授業外学習時間が求められており、そのためには 1 日に学習する授業コマ数は適切に抑制される必要がある。本学では 2013 年度から全学共通科目に CAP 制を導入し、2019 年度入学生までは原則として上限を 30 単位と定めていた。しかしながら、全学共通科目に加えて学部により専門基礎科目の履修が課せられていること、集中講義等の制限除外科目があること等から、1 回生で 70 単位以上も取得する学生が散見される事態となっていた。この状況を改善するため 2020 年度からは全履修科目の上限を原則 30 単位に制限する CAP 制度が採用されている。この設問ではこの制度の導入による変化を調査した。

図 24 の全体像では、昨年とほぼ同じ傾向が続いている。文系学部では 60 単位以上を取得した学生が 43%、理系学部では 50%もおり、1 回生で過剰な単位を取得することが常態化していると言える（65 単位以上取得の学生比率では、去年と今年で、文系 18%→5%、理系学生の 31%→10%と減少しているが、CAP 制とコロナ禍の影響を分離できない）。本学の多くの学部で卒業要件となっている 138~156 単位（大学設置基準では 124 単位）と比較すると、要卒単位の約半分を 1 年間で取得するという事態であり、本学の 1 回生は依然として単位取り過ぎの状態にある。これは単位の実質化の要請からも、また標準修業年数 4 年という教育体系から見ても好ましくない状態であり、改善するための対策を取る必要がある。現行 CAP 制度でも 1 回生前期に修得できる単位数を医学部で 36 単位、理学で 34 単位と特例が設けられている。また理学では成績優秀者には CAP 以上の単位修得を認めている。さらに 2020 年度はコロナ禍のため集中講義が増え、これを CAP 対象外としたため制度が十分に機能しなかった部分もあった。

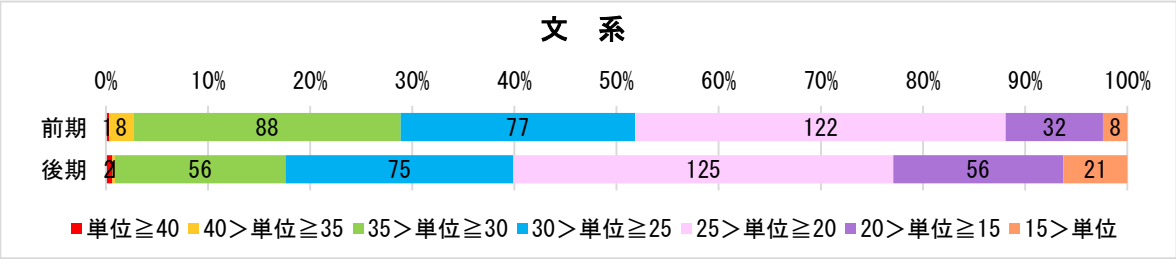
昨年の記述の繰り返しになるが、各学部で学生の履修行動を把握し、1 回生、特に前期に配当する教養・共通科目や専門基礎科目の種類や単位数等、2020 年度の全学的な CAP 制度導入に伴う動向を把握

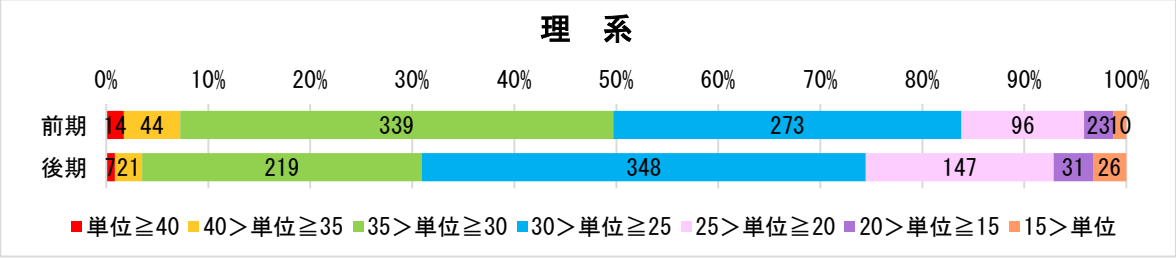
して１・２回生のカリキュラム全般について再検討されるように希望する。

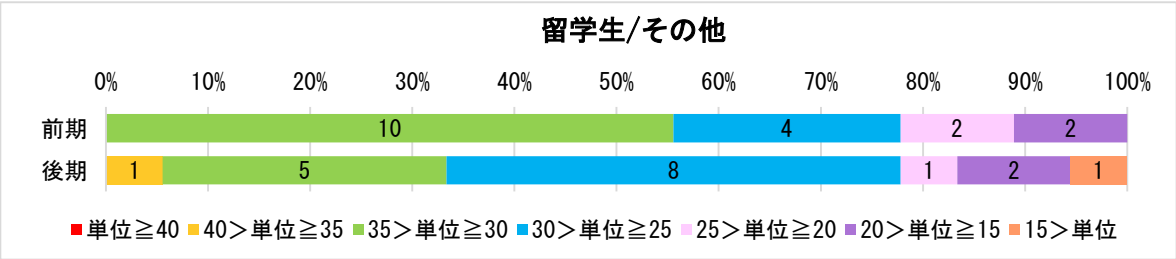
Q.24　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。
①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20　⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

Q.25　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。
①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20　⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

＜図 25　全学共通科目の取得単位＞



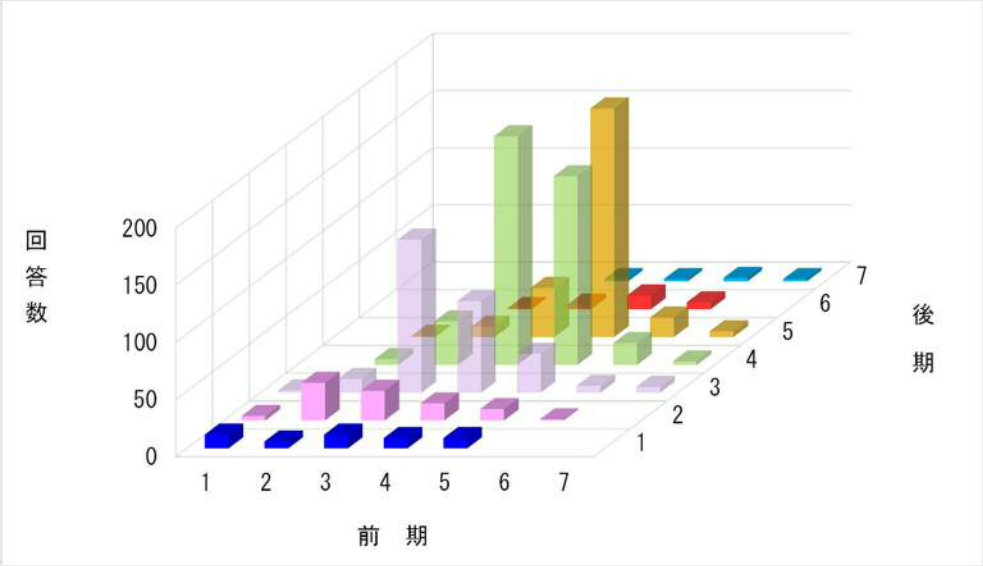




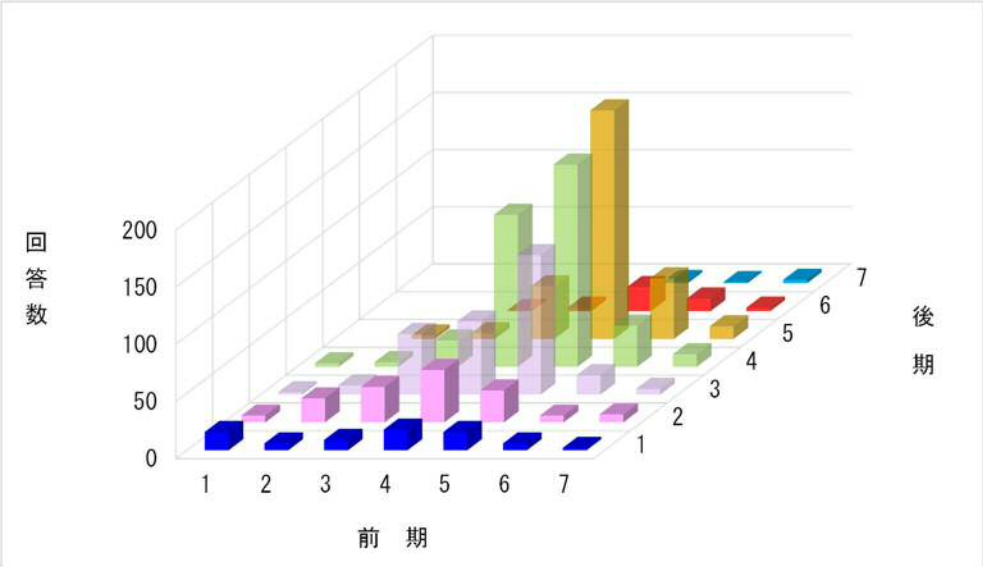
◇全学共通科目の取得単位：前期・後期の相関

図 26 のグラフで前期・後期の両軸の数値は以下のとおりとする：　「単位≧40」を 7、「40＞単位≧35」を 6、「35＞単位≧30」を 5、「30＞単位≧25」を 4、「25＞単位≧20」を 3、「20＞単位≧15」を 2、「15＞単位」を 1

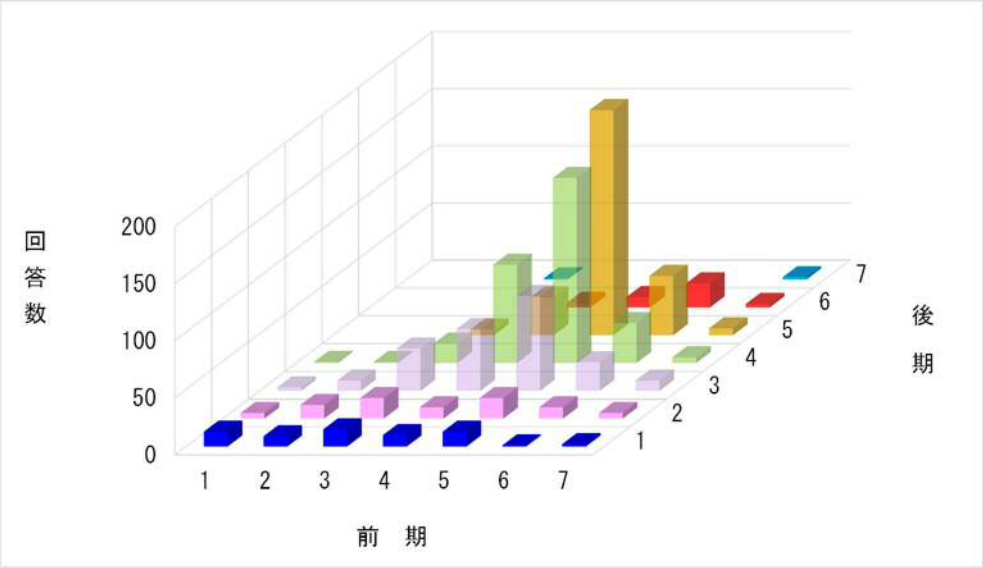
＜図 26-1　2020 年度の全学共通科目の取得単位：前期・後期の相関＞



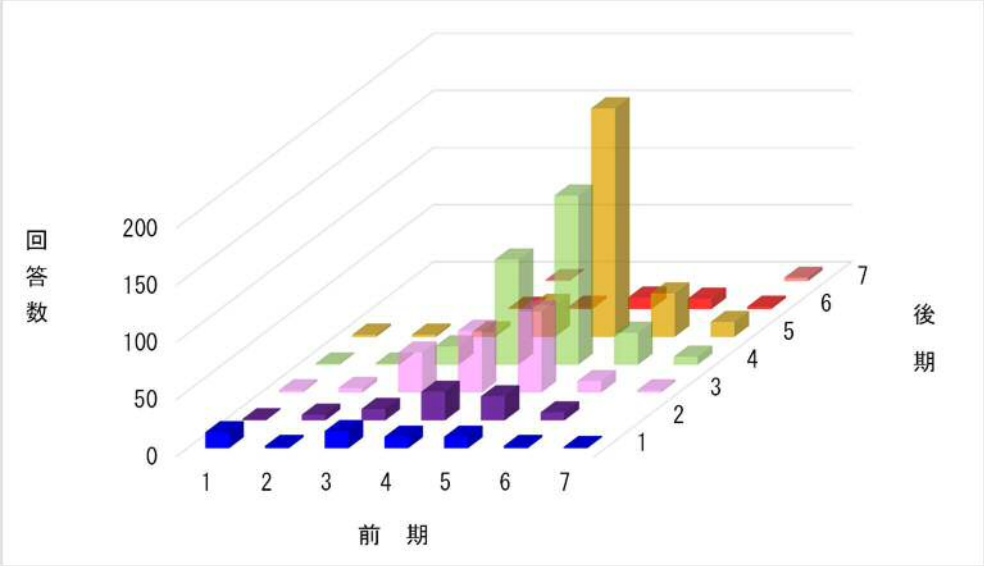
＜図 26-2　2019 年度の全学共通科目の取得単位：前期・後期の相関＞



＜図 26-3　2018 年度の全学共通科目の取得単位：前期・後期の相関＞



＜図 26-4　2017 年度の全学共通科目の取得単位：前期・後期の相関＞



Q.23 に続いて、取得単位の内の全学共通科目の単位数を前期、後期に分けて調査した。

図 25 で文系、理系で比較すると理系の方が取得単位数の多い学生比率が高いが、どちらも前期と比べて後期の取得単位は少なくなる傾向である。

図 26 では、過去 4 年分の前期・後期の単位取得数の相関を見ている。上述のように「35＞単位≧30」の区分 5 は、CAP 上限の区分であるが、それより多い区分 6、7 にもある程度の数の学生がいる。これは学部による条件の違いや、時間割に現れない集中講義の履修単位の取得によると思われる。図 26 でピークになる「前期 5、後期 5」の枠に着目すると、昨年度までは「前期 5」のまま手前側（後期で 4、3、2 と少ない単位数区分）に尾を引く分布になっていたが、今年度は「前期 4、後期 4」「前期 3、後期 3」「前期 2、後期 2」へと尾根がずれる分布へと変化した。前期に抑制気味に単位を取得した学生は、後期も抑

制気味に履修する傾向があると見ることができ、CAP 制の影響が出てきていると考えられる。しかし、先に述べたように、早期過剰取得の傾向も引き続き残っており、各学部の 1 回生カリキュラム、履修指導、さらに 2020 年度の CAP 数変更に伴う動向を注視しながら、制度の適正化を進めていく必要があると思われる。

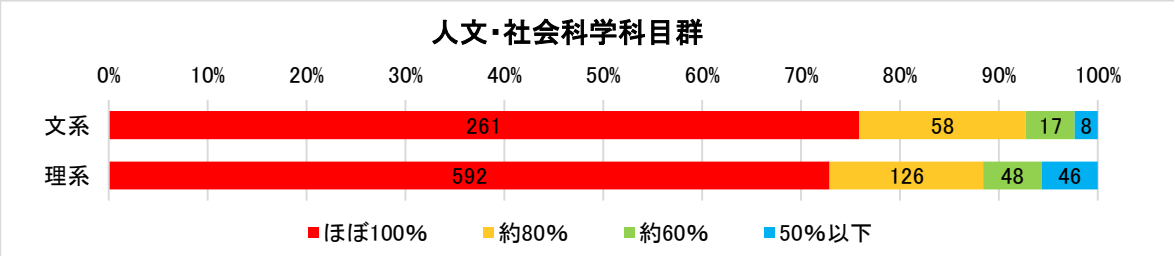
Q.26　1 回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.27　1 回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.28　1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.29　1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

＜図 27　授業出席率＞



4 科目群（「人文・社会科学科目群」「自然科学科目群」「外国語科目群・英語」「外国語科目群・初修外国語」）の授業出席率を文系・理系別に記載した。実際に出席回数を計測したのではなく学生本人の意識による集計であることに留意されたい。図 27 は人文・社会科学科目群の出席率を示したものである。授業についていくためにはやはり「80%以上」の出席率が必要と考えるが、文系は 90%以上、理系も 90%近くの学生が「80%以上」の出席率と答えている。

＜図 28　授業出席率＞

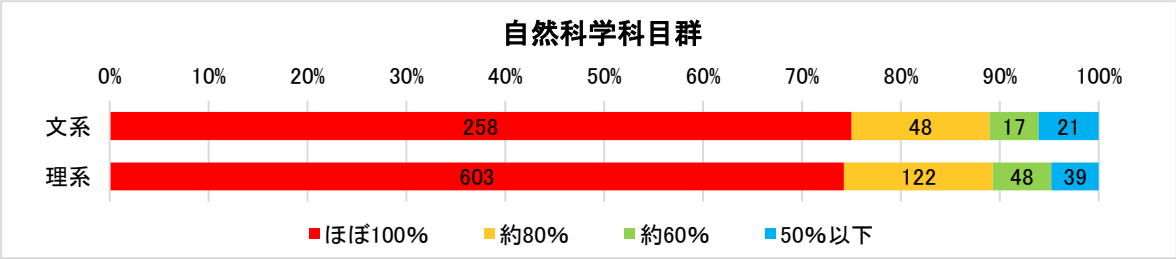
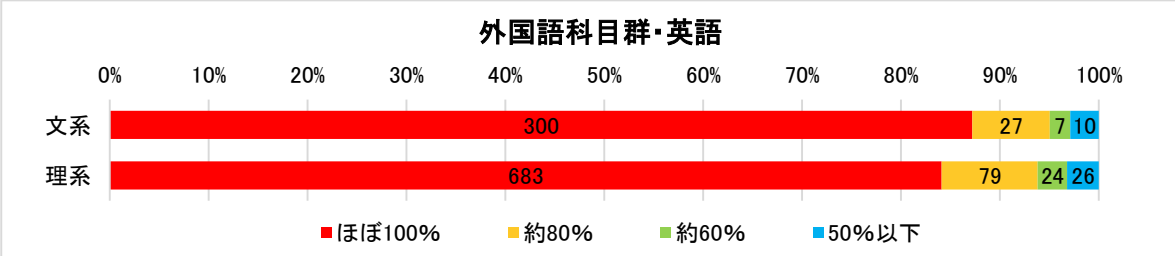
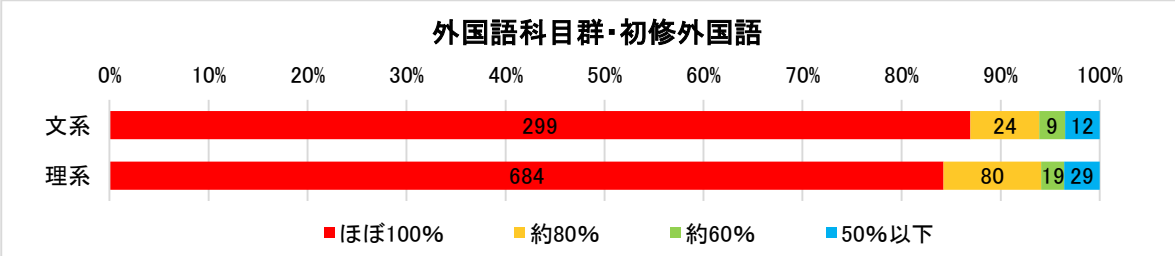


図 27 と同様に、「自然科学科目群」について尋ねたものがこの図である。結果は文系と理系であまり差がなく、図 27 の人文・社会科学科目群の出席率とも大差ない割合である。

＜図 29　授業出席率　上：英語、下：初修外国語＞





英語と初修外国語の出席率は高く、文系・理系とも「ほぼ 100％」と回答した学生の割合が 80％を超えており、「80％以上」では全体の 95％ちかくになっている。

このように 4 科目群で比較してみると、語学科目の出席率は人文社会科目群や自然科学科目群の出席率よりも明確に高い。出席点検や授業内での積極的な参加が求められる語学と、講義形式が多い一般科目との授業形態の差を反映しているものと思われる。教養・共通教育の在り方の議論において参考になる結果である。

また、「ほぼ 100％」「80％以上」の出席率は、文系理系、4 科目群ともに、一昨年・昨年より改善している。特に、人文社会科目群の「ほぼ 100％」の出席率は文系理系ともに 20%以上増えている。コロナ禍でオンライン授業の影響を受けていると考えられるが、年々の変動もあるので、今後の推移を注視していく必要がある。

Q.30 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください（非公開）。

①GPA ≧4.0　②4.0＞GPA≧3.5　③3.5＞GPA≧3.0　④3.0＞GPA≧2.5　⑤2.5＞GPA≧2.0
⑥2.0＞GPA≧1.5　⑦1.5＞GPA

Q.31　あなたが 1 回生後期（2018 年 12 月）に受けた TOEFL ITP のスコアはどのレベルでしたか。

①スコア≧550　②547≧スコア≧503　③500≧スコア≧450　④447≧スコア　（非公開）

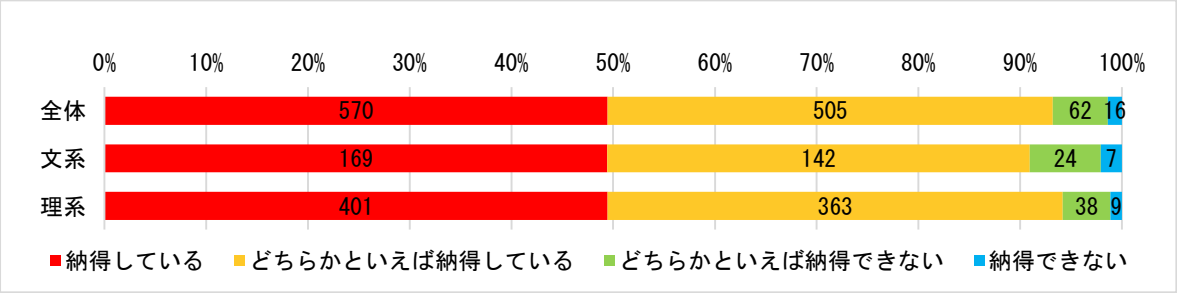
８．成績評価への納得度

Q.32　１回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします： 全体として自分の成績評価に納得していますか。

①納得している　②どちらかといえば納得している　③どちらかといえば納得できない

④納得できない

＜図 30　成績評価への納得度＞



成績評価の納得度については、これまでのアンケートでも同じ質問をして継続的に調査している。「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、肯定的な回答をした学生は文系・理系を問わず 90％を超えており、全体として納得度は高いと言える。

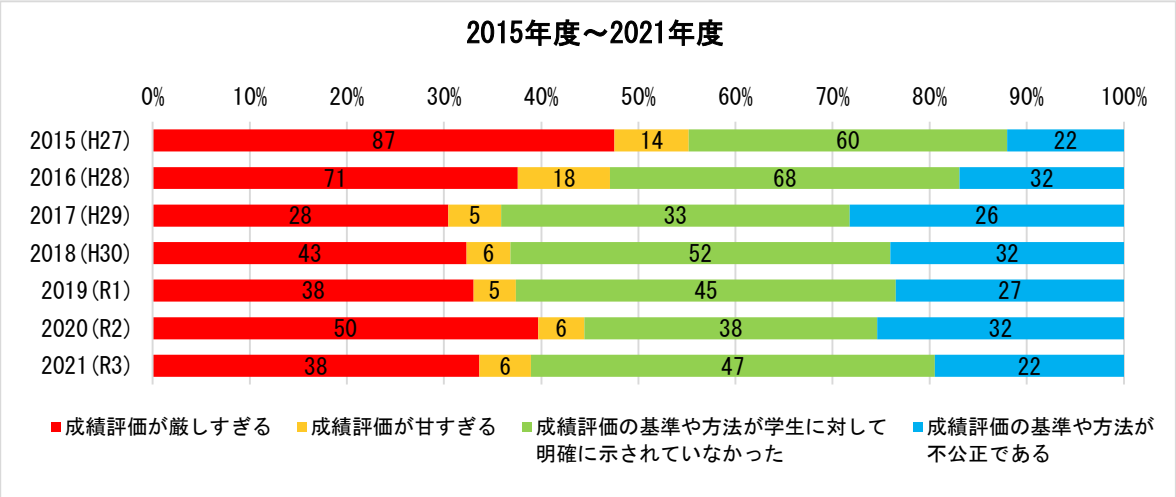
＜表 4　成績評価への納得度＞

	2005	2016	2017	2018	2019	2020	2021
納得している	39%	46%	41%	42%	40%	45%	49%
どちらかといえば納得している	46%	43%	48%	50%	52%	48%	44%
どちらかといえば納得できない	10%	8%	8%	6%	7%	5%	5%
納得できない	5%	3%	3%	2%	1%	2%	1%

この統計を取り始めた初期の頃（2005 年（平成 17）年）と、最近の傾向を比較するために、回答における各項目の百分率を表に示した。上述したように「納得している」、「どちらかといえば納得している」を合わせると、最近では毎年肯定的な回答が 90％以上を維持している。

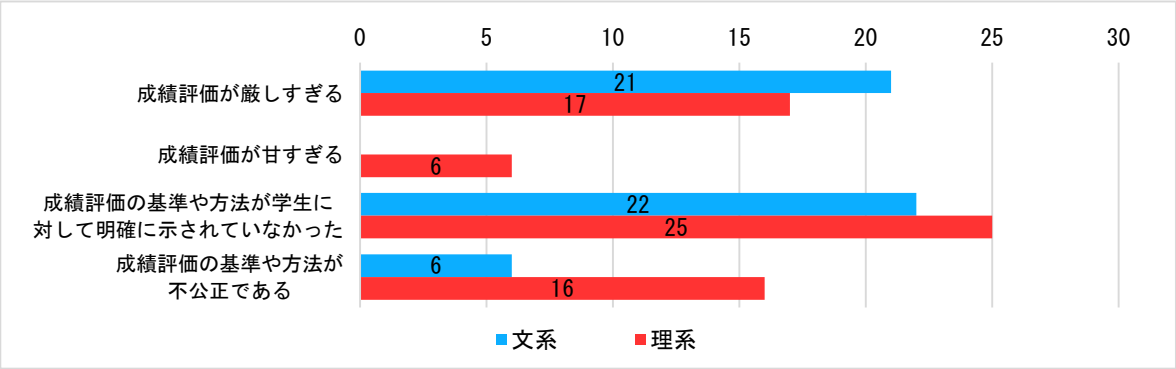
Q.33　Q.32 で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものにチェックをつけてください。
①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる　③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった　④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他（記述回答）

＜図 31　成績評価に納得できなかった各理由の比率（複数回答）＞



Q.33 では成績評価に納得できない理由を尋ねた。この質問は毎年継続して質問している項目である。複数回答を可能にしているので、全回答における①～④の比率を図示している。2015 年度からのデータと合わせて変化を見ると、当初は①の「厳し過ぎる」の割合は次第に減る一方、④の「不公正」と感じる学生の割合が増加していたが、ここ 5 年ほどはおよそ一定に落ち着いたようにみえる。推測であるが、GPA の導入で成績に対する関心が高まり、相対評価としての明確さ、公平さを求める意見が強くなり、高止まりしているのではないだろうか。ただし、回答全体の 90％の学生は「納得している」と答えており、この項については回答者のうち約 10％の意見であることに留意して判断する必要がある。

＜図 32　成績評価に納得できなかった各理由の回答度数（複数回答）＞

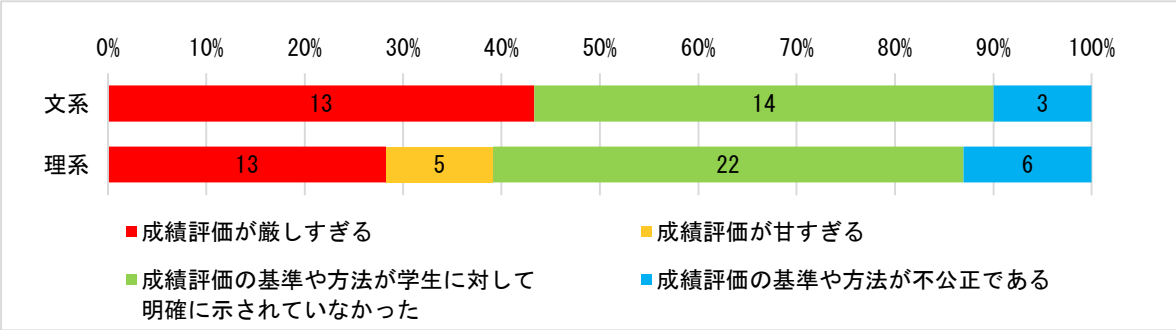


この図では文系と理系で回答度数を単純に表示している。以前の調査では、文系学生は①の「成績評価が厳しすぎる」が最も多く、次いで③「基準や方法が不明確」が多い時期があった。しかし、最近では文

系、理系とも似た傾向になり、今年も③「基準や方法が不明確」が最も多く、次いで①の「成績評価が厳しすぎる」が多かった。また理系では④「基準や方法が不公正」の回答がより多くなる。上述したように相対評価に対する関心が理系の学生の方により強く表れている。コース分けや配属などで成績評価が用いられることが理系では多いため、より合理的な成績評価を求めるものと推測される。

Q.34　Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの 1 つを選択してください。
①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる　③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった　④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他

＜図 33　成績評価に納得できなかった理由（最も重要なもの 1 つ）＞



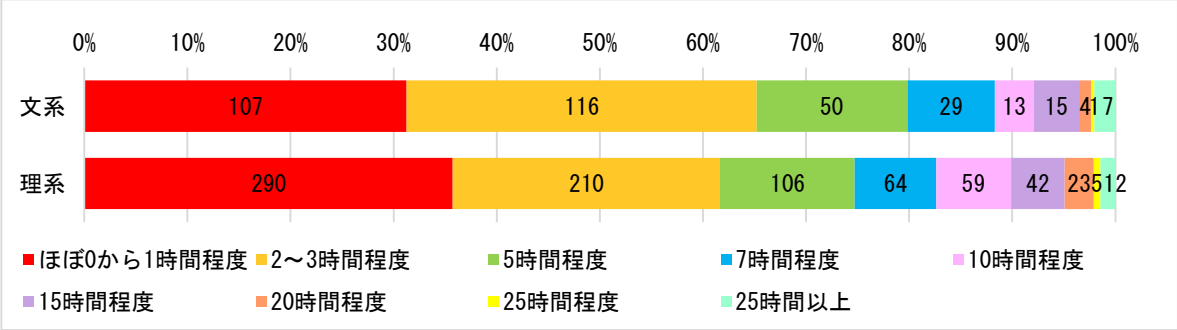
納得できない理由の最重要項目として選ばれた項目がこの図である。回答数が少ないため変動が大きく、信頼性に欠けるが、先の複数回答と同じく、単一回答においても③「基準や方法が不明確」という成績評価の方法についての理由が半数ちかくとなり、次に①の「成績評価が厳しすぎる」が多くなった。

9．学生生活

Q.35　平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。

①ほぼ 0 から 1 時間程度　②2～3 時間程度　③5 時間程度　④7 時間程度　⑤10 時間程度
⑥15 時間程度　⑦20 時間程度　⑧25 時間程度　⑨25 時間以上

＜図 34　1 週間に運動する時間＞

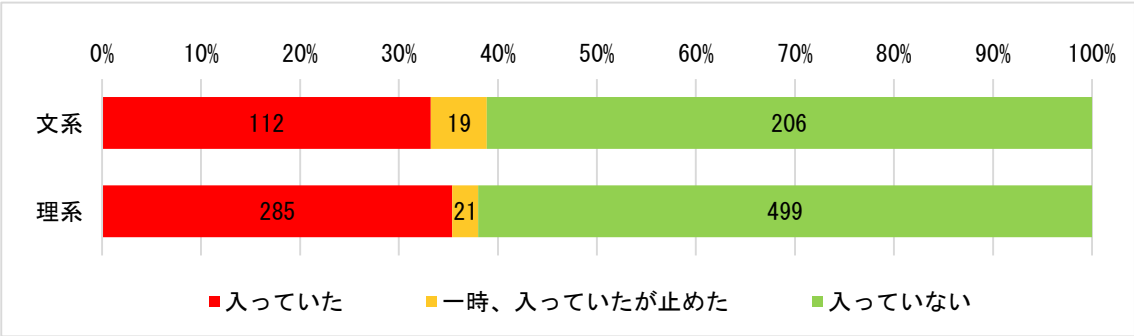


この質問では、1 週間に運動する時間を尋ねた。結果を図 34 に示したが、全体として昨年とほぼ同じ結果である。文系、理系を問わず約 1/3 の学生は 0～1 時間/週程度とほとんど運動をしていない。Q.22 の回答から明らかなように、正課のスポーツ実習を履修していない学生が 80%以上いること、さらに彼らが 18～19 才という年齢を考えると、あまりに運動量が少ないことに驚く結果である。30%前後の学生は週 2～3 時間、つまり一日に 20 分程度の運動をしている。週 7 時間以上の学生はおそらく体育系のサークルやクラブに入っている学生と思われるが、その比率は 20~25%程度である。

Q.36　あなたは、1 回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。

①入っていた　②一時、入っていたが止めた　③入っていない

＜図 35　運動系のクラブ・サークル＞

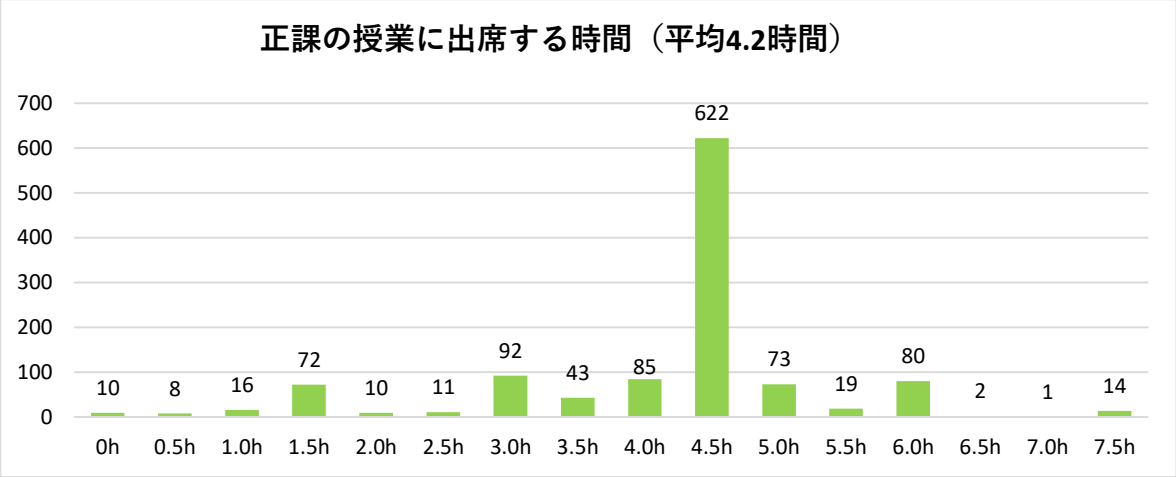


昨年・一昨年はサークルに入っていた学生が約半数いたが、今年は 35%程度であり、逆に、入っていない学生は 20%以上増えた。コロナ禍の影響が大きいと考えられる。

Q.37～Q.43　授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.37~Q.43の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜通学時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞＜週末（土日）での予習・復習・レポート作成等の時間＞です。
ただし、ここでは便宜的に、非対面授業のオンライン・オンデマンド型は＜正課の授業出席時間＞に、課題研究型は＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞に加えてください。

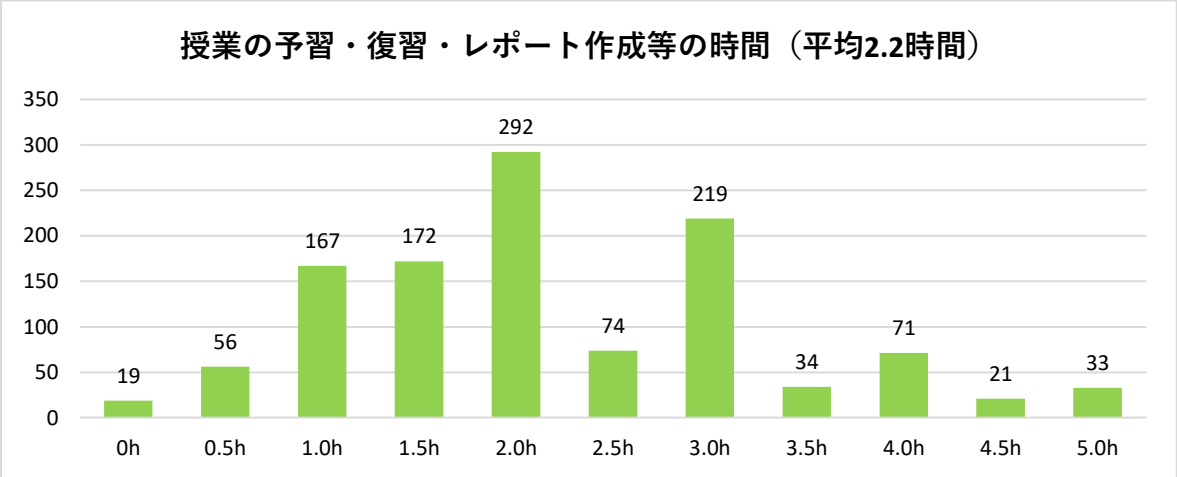
Q.37　＜正課の授業に出席する時間＞（1 コマの授業は 1.5 時間です）

＜図 36＞



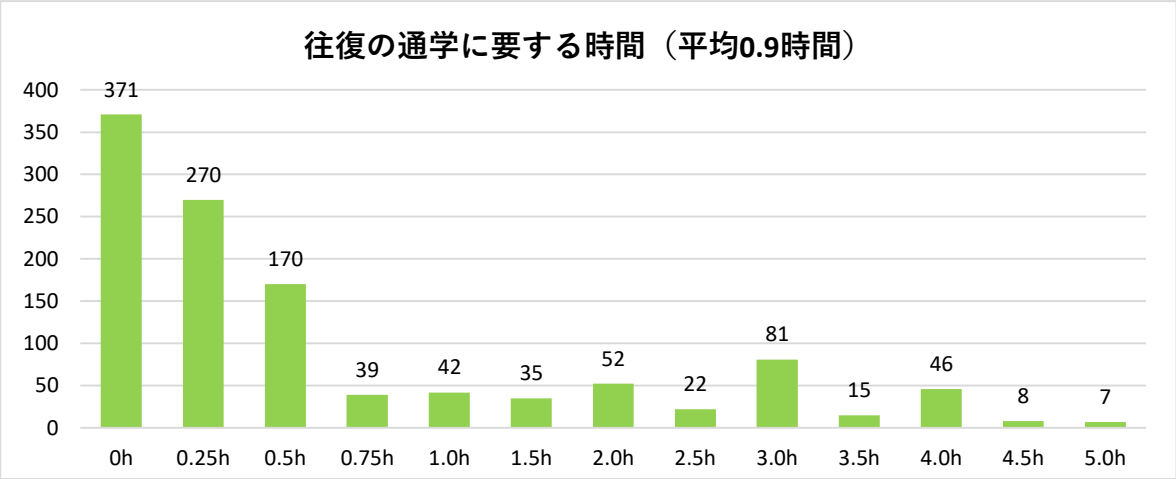
Q.38　＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞

＜図 37＞



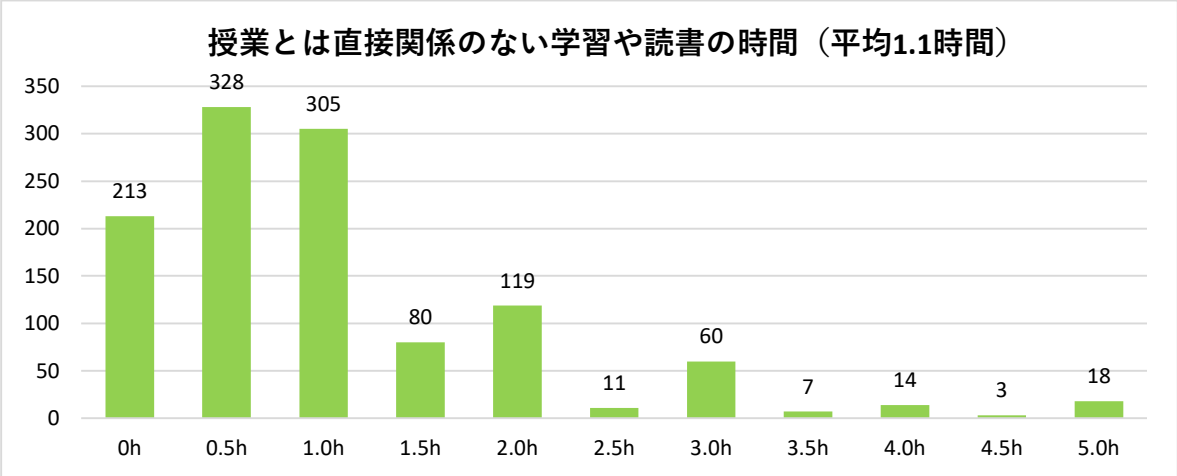
Q.39　＜往復の通学に要する時間＞

＜図 38＞



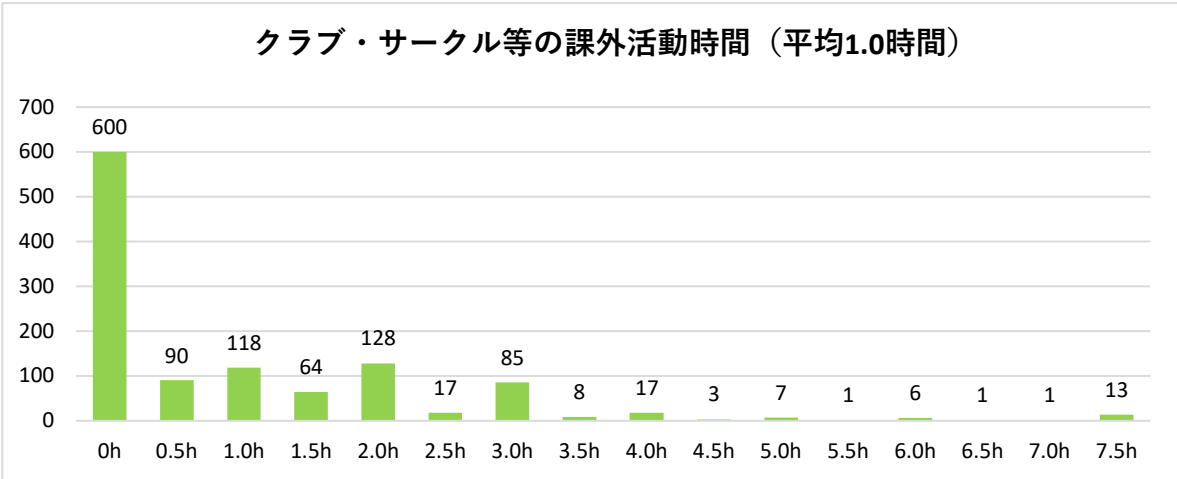
Q.40　＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞

＜図 39＞



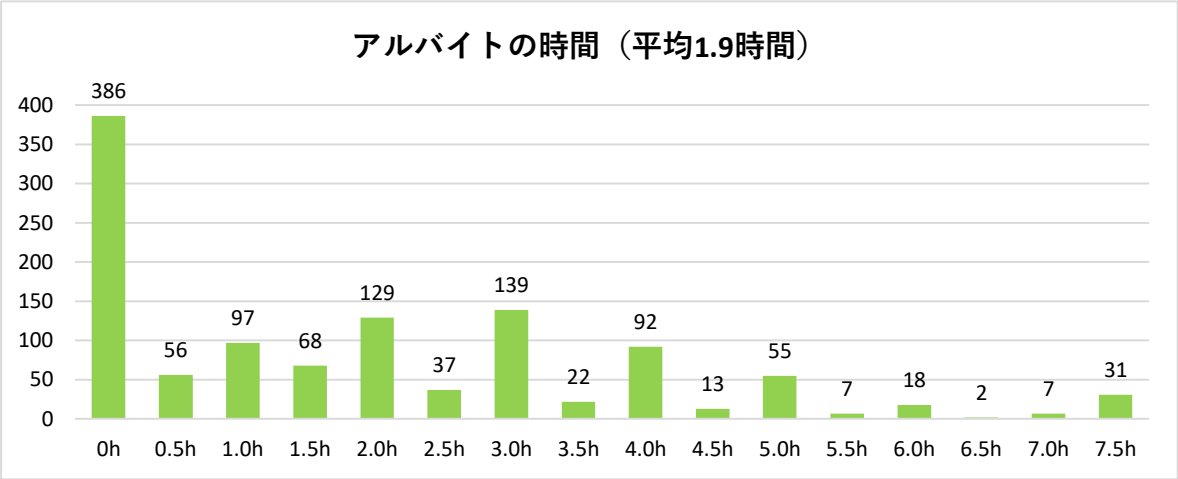
Q.41　＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞

＜図 40＞



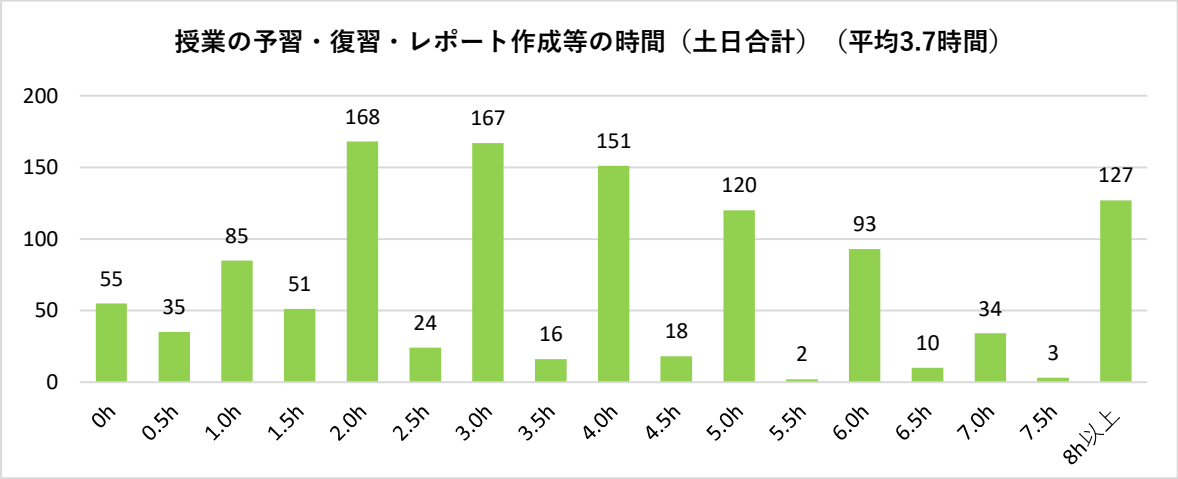
Q.42　＜アルバイトの時間＞

＜図 41＞



Q.43　授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を答えてください。

＜図 42＞



1 回生がどのように生活時間を配分しているか、学生生活の実態と学習行動との関連を Q.37~Q.43 の 7 項目の質問により調べた。各項目について生活時間の人数分布を図 36～42 に記載している。また、表 5 に全体、文系、理系での各項目平均値を示した。

以前の調査では、1 週間当たりの活動時間を尋ね、時間数の記入を求めたところ、不合理な数字が多数入力されたため、2018 年より、質問は学期中の平均的な 1 日（休祝日を除く月曜日～金曜日）での時間配分を尋ねることに変更した。したがって、休日に多いであろう「アルバイト」、「授業とは直接関係のない学習や読書の時間」等については解釈に注意が必要である。また、Q.38 の「平日における時間外学習時間」では測定できない授業外学習時間が残るため、週末（土曜・日曜）に「授業の予習・復習・レポート作成等の時間」に費やす合計時間を問うことにした。以下の図表では、この項目（＊＊）については 1 日当たりの時間ではないことにご注意いただきたい。

＜表５　１回生の学生生活時間／日　(　)内は昨年の結果＞

R3	正課	予習･復習等	通学	＊	クラブ	バイト	週末学習時間＊＊
全　体	4.2(4.5)	2.2(1.6)	0.9(1.1)	1.1(1.0)	1.0(1.8)	1.9(2.0)	3.7(2.7)
文　系	4.2(4.5)	2.0(1.5)	0.8(1.0)	1.2(1.2)	1.0(2.0)	2.2(2.2)	3.2(2.4)
理　系	4.1(4.6)	2.3(1.7)	0.9(1.1)	1.0(0.9)	0.9(1.8)	1.8(2.0)	3.9(2.9)

＊授業とは直接関係のない学習や読書の時間

＊＊週末の予習・復習等（土日の合計であり１日当たりではない）

全体の平均値で見ると、昨年までの結果とほとんど同じ値かやや減の項目（正課、授業とは直接関係のない学習や読書、バイト）と、コロナ禍の影響で大きく変化した項目に分かれる。後者では、予習・復習が約 40%増、クラブが 45%減であり、週末学習時間も 1 時間、37%増となっている。

・正課授業出席時間の 1 日 4.5 時間は、 1 コマ授業を 1.5 時間として 1 日 3 コマに相当している。図 36 を見ても、4.5h の回答が突出して多い。1 コマを 2 単位科目として換算すると 1 日 3 コマは週 15 コマ、年 60 単位となり、Q.23 で約半数の学生が 60 単位以上取得していたことと整合している。文系と理系で比較すると、例年わずかながら差があり、理系のカリキュラムの方がやや密になっていることを示していたが、昨年は文系の時間増加がみられ理系との差が僅差になり、今年逆転した。

・単位の実質化の議論でも着目され、かつ成績に影響するであろう授業時間外学習時間（授業の予習・復習・レポート作成等の時間）の項目は、これまで 1.5h→1.4h→1.6h→2.2h と変化した。0.1h 程度の年々の変動に対して、0.6h 増はコロナ禍の影響があると考えられる。また、週末の予習・復習等の学習時間（＊＊）も土日合計で、2.1h→2.7h→3.7h と変化しており、やはり 1 時間増はコロナ禍の影響があると考えられる。大学設置基準は授業時間外学習時間として 2 単位授業 1 コマ当たり 4 時間の時間外学習を規定している。前述の 1 日 2.8 コマ授業が現実とすると、1 日 11.2 時間（設置基準）が要求されることなり、2.2 時間（現実）とはあまりにも大きな隔たりがある。設置基準が非現実的であるということはたやすいが、それにしても時間外学習時間が 1 コマ授業当たり 0.8 時間（2.2 時間/2.8 コマ）程度という現実の値は大学の授業のあり方を再検討する必要を示している。

・通学時間については、実際に費やした時間ではなく、コロナ禍と関係なく居住場所からの往復時間を答えたものが相当数あったと思われ、昨年までとの比較は注意が必要である。図 38 の分布をこれまでと比較して、0.25h と 0.5h が大きく減り、0h が大きく増えたのは、近隣からの通学学生は多くが非対面授業の影響を加味して答えたためと思われる。他方、0.75h 以上の部分は昨年までとあまり変わらず、単に通学に要する時間を答えた学生が多数を占めたと思われる。多くの学生は 1 時間以内であるが、往復 2.5 時間以上の長距離通学をしている学生が 15％以上（昨年は約 20％）もいることは、さまざまな企画をする上で留意しておく必要がある。

その他の項目についてみると、

・授業とは直接関係のない学習や読書の時間（＊）では、文系学生がこれまで 1.3h→1.1h→1.2h→1.2h と推移してきており、理系の 1.0h→0.9h→0.9h→1.0h より常にやや長い値となっている。以前の調査で読書について尋ねたが、その結果から推測すると、理系学生には授業の教科書、参考書以外の読

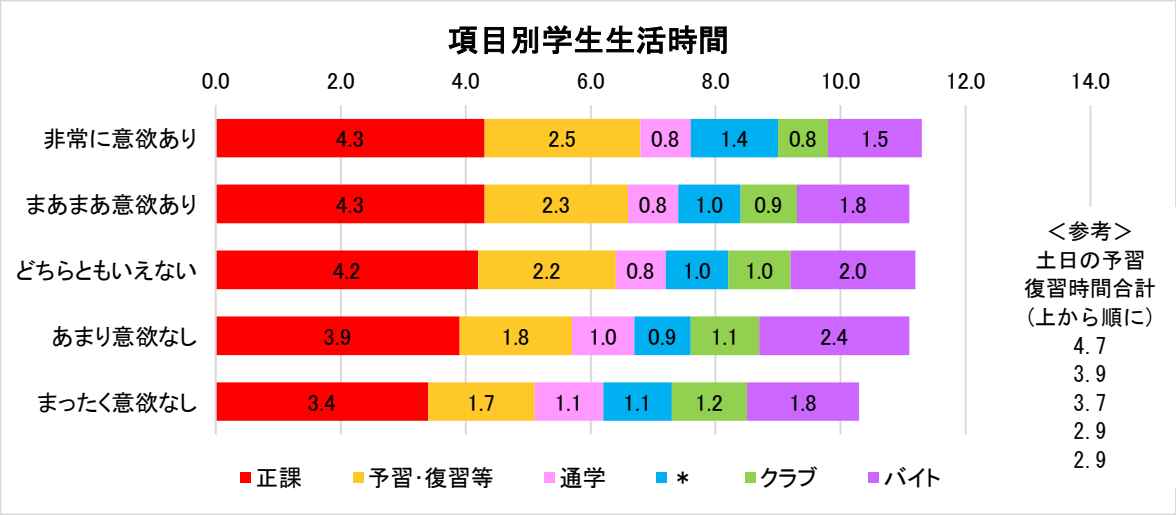
書を全くしない学生が少なからずいるものと思われる。

・クラブ・サークルには多くの学生が参加しており、昨年に課外活動時間がゼロと答えた学生は 15%であったが、今年は 33%であった。コロナ禍の影響を受けていることに留意しつつ、図 40 の分布図を見ると、ゼロを含む 2 時間以下の学生はこれまで 71%→68%→63%→86%であるが、他方 2.5 時間以上は 29%→32%→37%→14%である。

・Q.42 のアルバイトの項目では、学生の回答は 2 分化しており、平均値にあまり意味はないと考えられるが、これまで 2.1h→2.1h→2.0h→1.9h と推移してきており、コロナ禍の影響はあっても限定的であると考えられる。図 41 の分布図から分かるように、アルバイトをしていない実質ゼロ時間の学生が多数いる一方、アルバイトをしている学生群は 1 日当たり 2~3 時間程度にピークをもつ分布になる。1 日 4 時間以上と回答した学生は 225 名、5 時間以上は 120 名であり、それぞれ全回答者数 1159 名の 19%、10%になる。この中には経済的に困窮してバイトに追われる学生も多くいると思われるが、このような学生生活では勉学との両立は難しいものと思われる。

次に、Q.09「後期開始時の学習意欲」と学生生活との関連性を調べた。

＜図 43　学習意欲（後期始め）と学生生活時間＞



後期開始時の学習意欲―生活時間の図表とも、正課授業出席時間、授業時間外学習時間（予習・復習・課題等）に明確な傾向が表れている。すなわち、学習意欲の高い群ほど、正課授業出席時間、時間外学習時間が長く、その和である全学習時間が伸びている。意欲の低い群から順に 5.1→5.7→6.4→6.6→6.8h である。これらの昨年の値 4.7→5.4→6.0→6.2→6.9h と比べると、「非常に意欲あり」以外、全学習時間がやや長くなっている。「非常に意欲あり」から「どちらともいえない」までの中高位群では、全学習時間の差は小さいが、いずれの分類でも下位区分になるとその減少は顕著である。

図 43 には、一昨年から設問に加えた「週末（土日）の授業に関係する時間外学習時間」（＊＊）も欄外に参考として記載した。平日 1 日当たりの時間ではなく休日の合計時間であることには注意が必要であるが、学習意欲において、この週末学習を加えた授業時間外学習の合計時間と顕著な相関がみられる。

様々な要素が複雑に作用しているが、上に指摘したように、正課授業出席時間よりは時間外学習時間が学習意欲、学習成績の向上と強く相関していることは明白である。ここで、学生側の意欲に期待するのみならず、予習、復習を含めた学習意欲と行動を喚起する工夫を授業に組入れることが、同じ正課授業時間を使いつつ学習効果を上げる有効な方法と思われ、今後の教育改善の方向性を示唆している。

正課授業出席時間と時間外学習時間を合せた適切な学習時間については議論が必要である。学習時間が長ければ良いというものではない。多数派の中位群で、1 回生がおおよそ平日授業 4.5 時間＋予習復習 1.5 時間＝6.0 時間学習の大学生活を送り、かつ年 60 単位以上も取得することについて、やはり疑問を感じる。質問・回答様式を一定にして、生活時間に関するこれらの項目の推移を長期的に観測するべきである。

また、図 43 で、棒グラフの長さ（調査した活動項目の合計時間＝11 時間強）が最下位群では 1 時間前後短くなることも気がかりである。以前のこの調査で、 1 日の睡眠時間はどの群でも 7 時間程度と一定であったことから、調査項目になっていない余暇時間が約 6 時間（＝24-11-7）であり、余暇時間が最下位群で長くなることを意味している。この余暇時間には、食事や休憩、友人との交際、運動、TV、ゲーム等、さまざまな生活時間が考えられる。もちろんこれらは健康的な学生生活を送るために必要な時間である。最近の 1 回生は多数の科目を履修して忙しい毎日を送っていると言われているが、意欲低下、成績下位群ほど実態のわからない余暇時間が増えていることは気がかりな点である。

１０．学生の期待

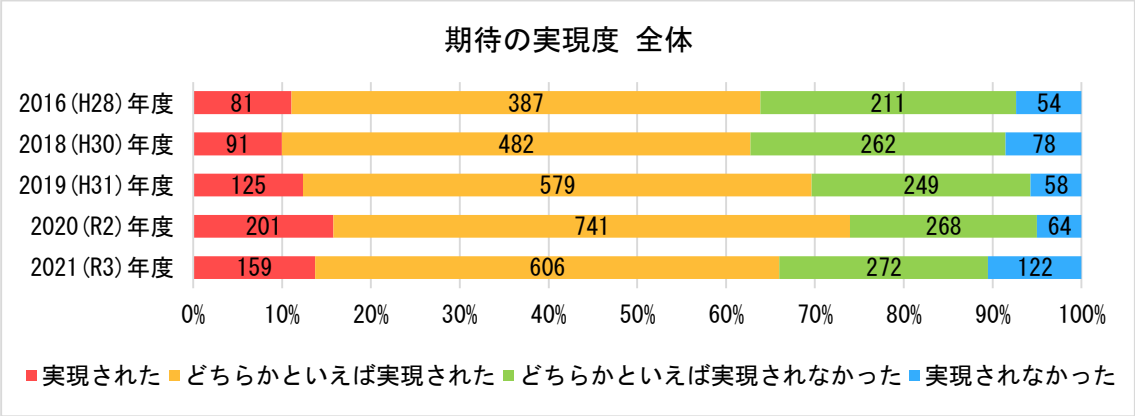
次に、全体的な印象として全学共通科目に対する期待の実現度を問うた。

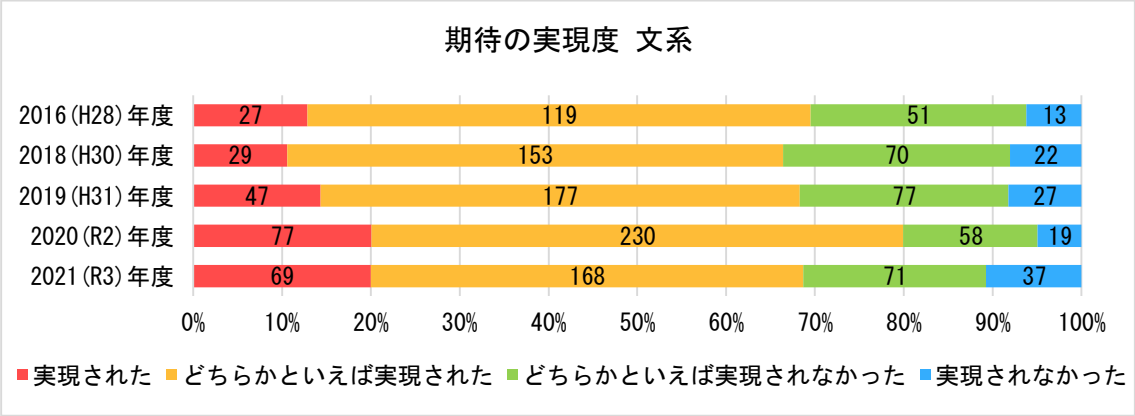
Q.44　全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。

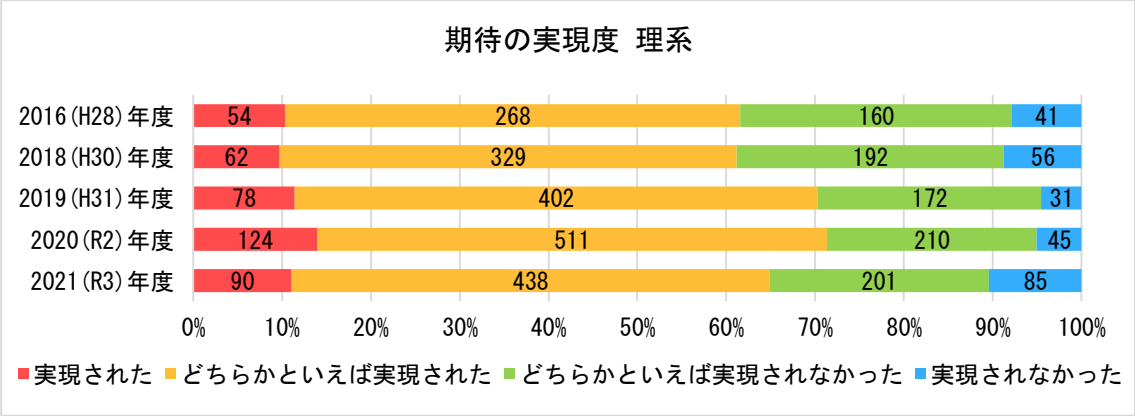
①実現された　　②どちらかといえば実現された

③どちらかといえば実現されなかった　　④実現されなかった

＜図 44　期待の実現度＞







今年度（2021 年度）の結果を見ると、「実現された」＋「どちらかといえば実現された」という肯定的な意見が約 66%になり、昨年の 74%より減って、2・3 年前の割合に戻っている。2016 年以降、同様な質問をしているので、図 44 にはその回答の経年変化を見られるようにしている。昨年まで上昇傾向が続いており好ましい結果であったが、今年は減少に転じた。逆に、「実現されなかった」が過去 5 年間で最大の 11%となったことには注意する必要がある。コロナ禍の影響を含めて経年変化傾向を判断するためにも、今後継続して注視していく必要がある。文系、理系の内訳をみると、年々のバラつきはあるものの全体と同様の変動となっている。

「期待の実現度」は、向上感、達成感、ひいては教養・共通教育の成果に結びつく重要な要素であることから、今後とも注視するべき調査項目である。

１１．教養・共通教育についての意見

Q.45　今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。

①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい

③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい

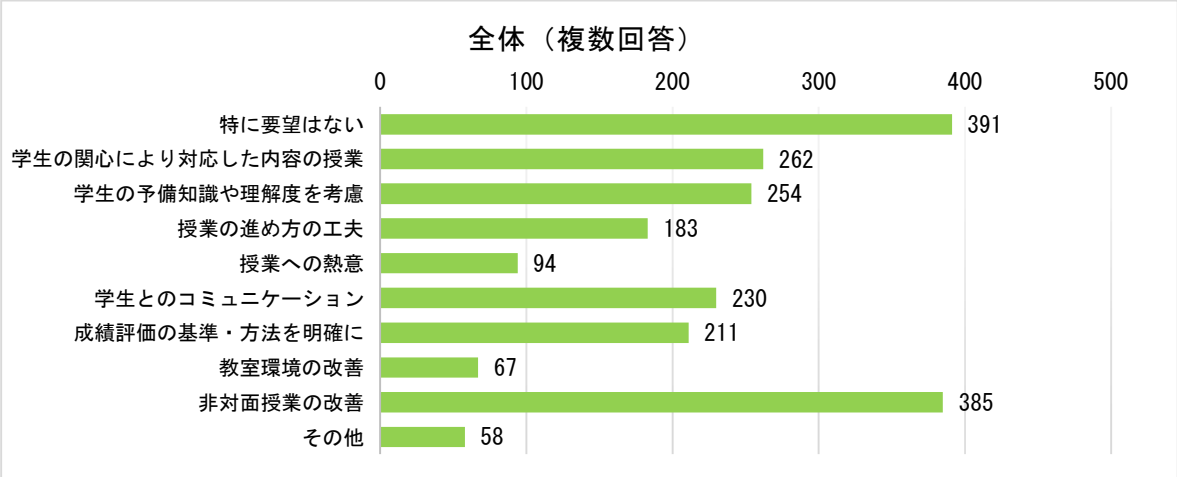
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい

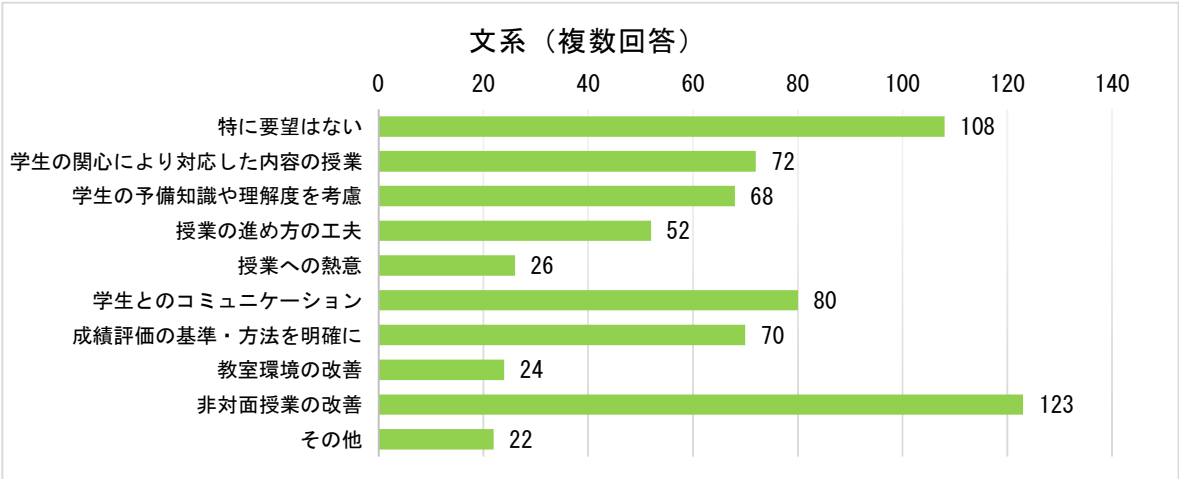
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい

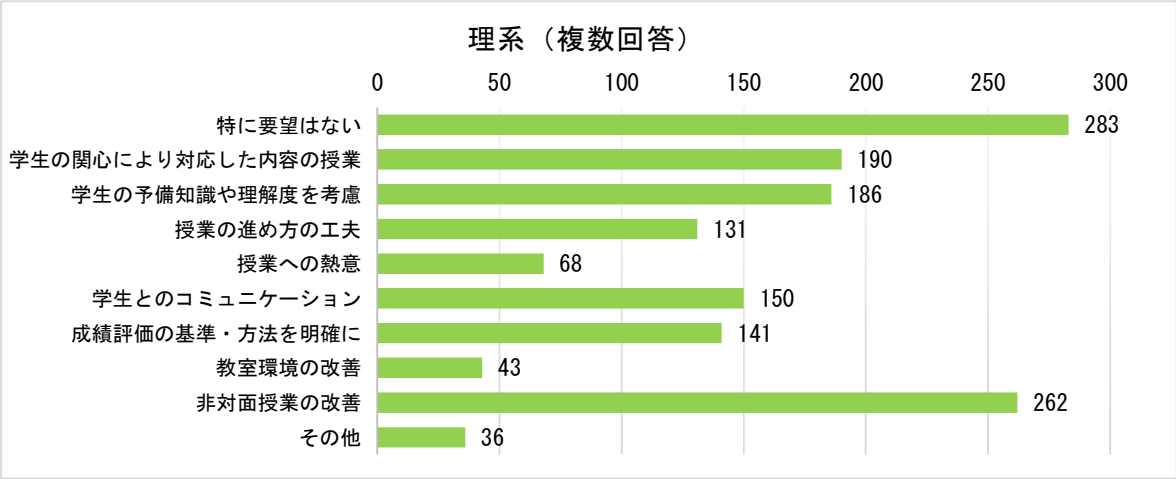
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい

⑩その他（Q.48 で回答）

＜図 45　全学共通科目の改善要望（複数回答）＞







Q.46　Q.45 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。

①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい

③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい

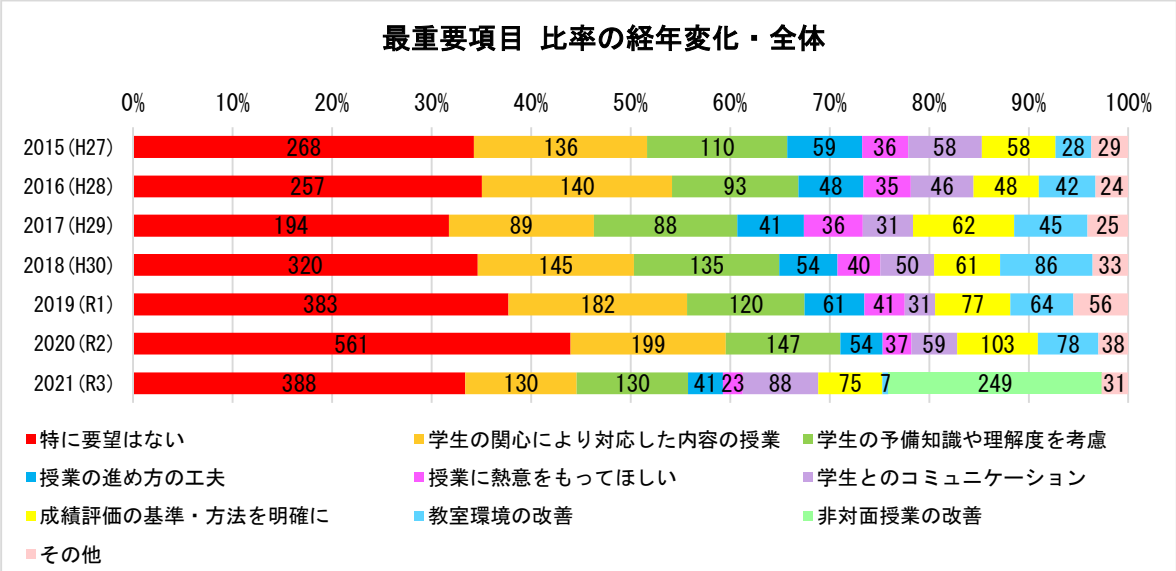
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい

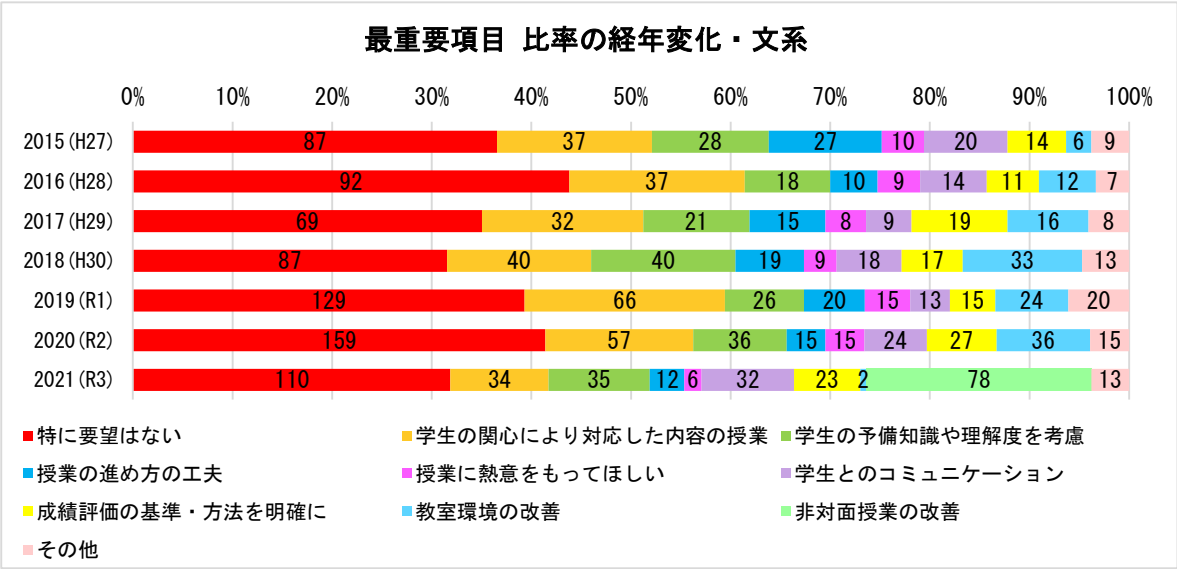
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい

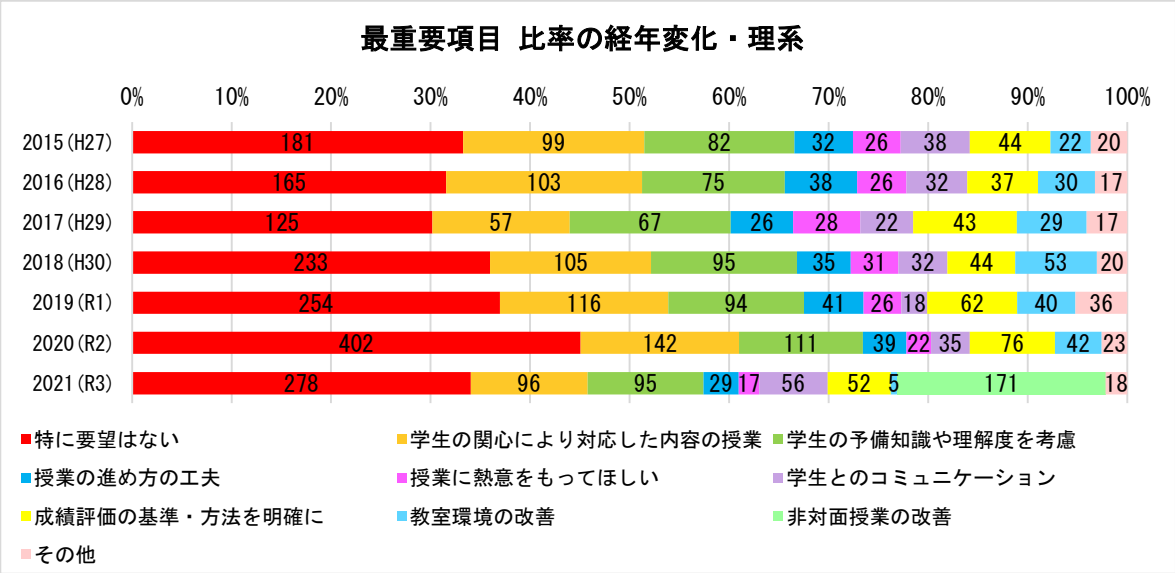
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい

⑩その他

＜図 46　全学共通科目の改善要望（最重要項目）＞





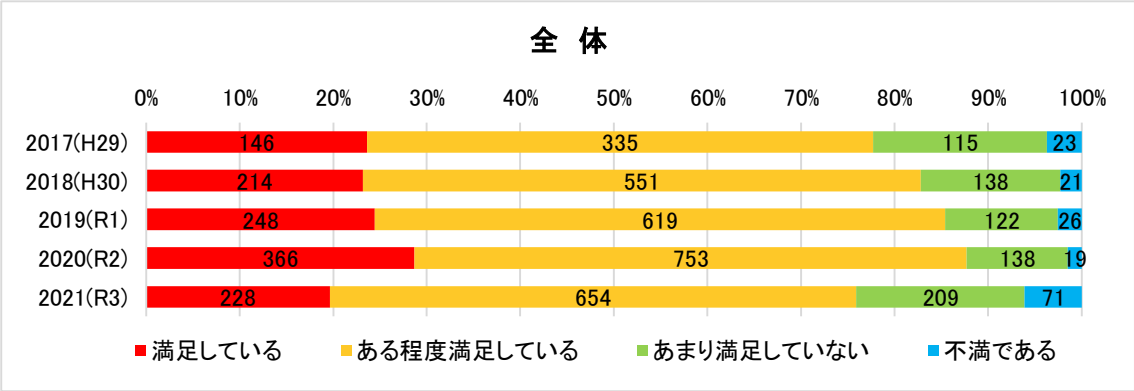


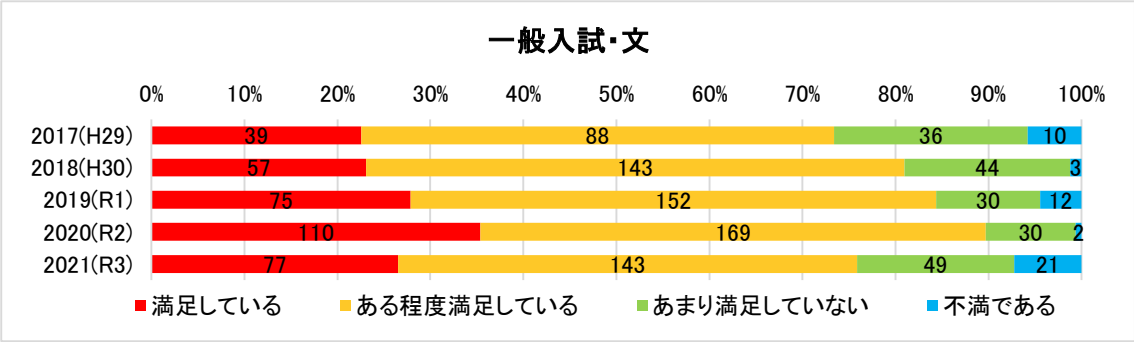
この項目についても毎年質問して、経年変化をみている。ただし、今年は⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）の項目を追加した。図 45 は改善要望を複数回答で尋ねた結果の度数分布を示している。全体としては「特にない」の回答数がもっとも多いが、「非対面授業の改善」も同程度ある。理系では「特にない」以外の項目でも 100 名を超える多くの要望があり、学生の関心や理解度に考慮をもとめる要望や、学生とのコミュニケーション、成績評価に関する要望が多い。

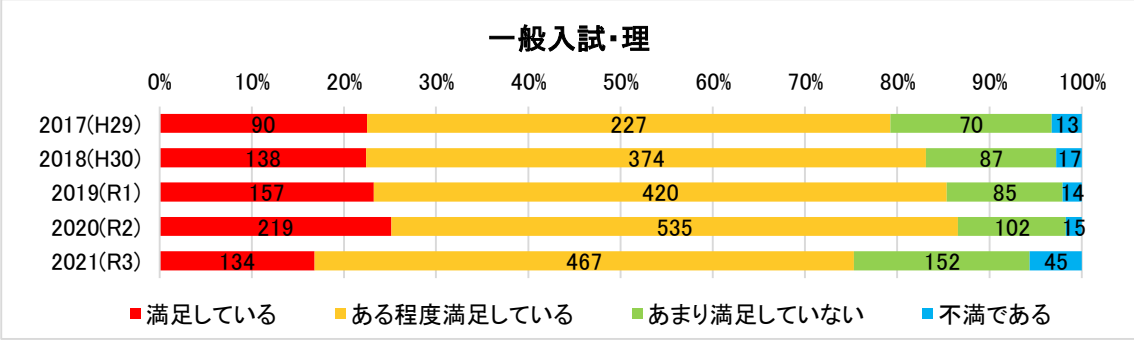
図 46 は、要望の中で最重要な項目と指摘された項目の割合を、2015 年から 7 年間について図示したものである。全体をみると、「特に要望はない」が 30%を超えている。昨年まで、年を追って増えて昨年 40%を越えたことは良い傾向と言えるが、今年はコロナ禍の影響で 10%ほど減少した。一方、「非対面授業の改善」は 20%以上を占めている。上述の 4 項目に対しても多くの学生が最重要項目として要望している（とくに②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい、③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい、はそれぞれ 10%以上）ことに留意しておかなければならない。

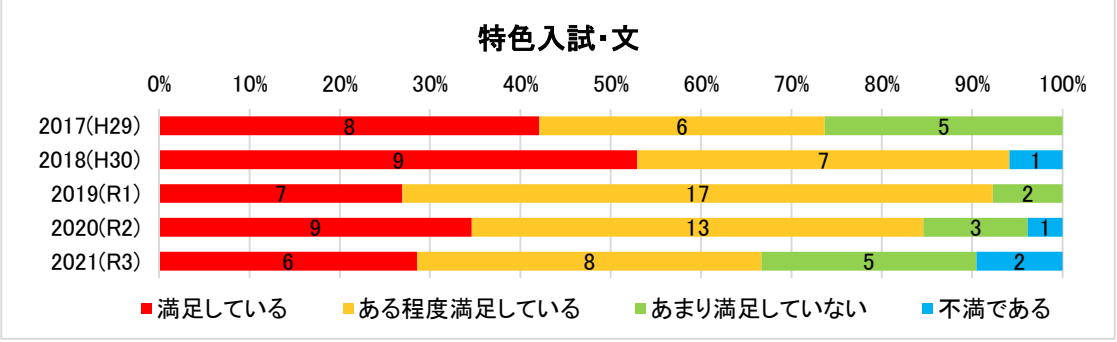
Q.47　この１年間に受けた教養・共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。
①満足している　②ある程度満足している　③あまり満足していない　④不満である

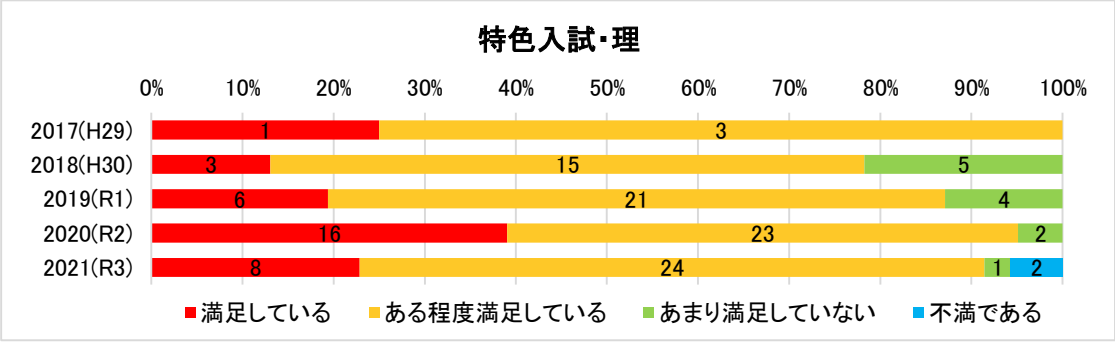
＜図 47　総合的満足度＞

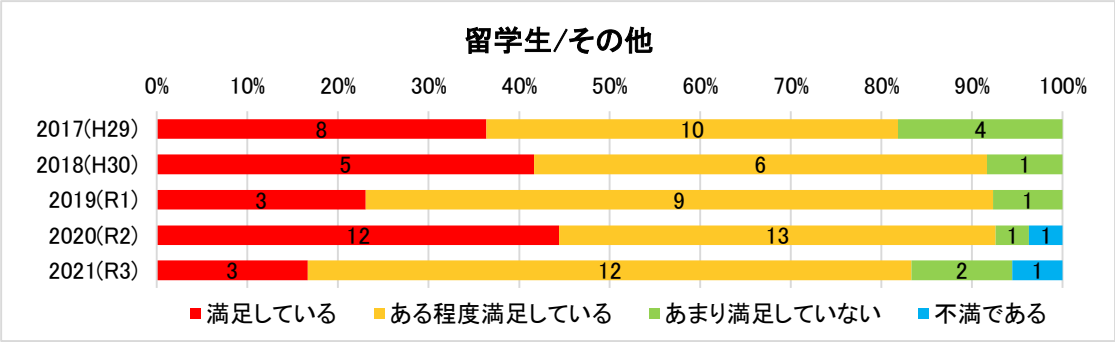












アンケートの最後に、１回生の１年間に受けた教養・共通教育を振り返っての満足度を尋ねた。図 47 には、入試区分別に 2017 年度からの 5 年間の結果を比較して記載した。昨年までは肯定的回答が増加する良い傾向を示していたが、今年は全体で「満足している」が 10%近く減少した。「満足している」＋「ある程度満足している」の肯定的意見は、全体で 2017 年から 78%→83%→85%→88%→76%と推移しており、コロナ禍の影響があるものの、依然として高いレベルにあると言える。特色入試や留学生の区分では回答数が少なく有意の傾向を把握しづらいが、一般入試の文系・理系は全体と同じ傾向を示している。

次に、学生の満足度に影響を与える因子を検討するため、他の質問項目との関連を調べて表 6 に掲載した。この解釈にはいろいろな見方ができるが、高い満足度を与える項目（満足度の全体平均値は一昨年より 3.07→3.14→2.89 と推移している）と、関連を調べた各項目で回答①→④（⑤）の高位群→低位群により満足度が明確に減少する項目に着目した。このような観点からすると、予想通り「学習意欲」がもっとも顕著（3.23）であり、「専門との一致度」、「成績評価に対する納得度」の 2 項目では、高位の①で 3.08~3.11 の高い満足度を示し、かつ下位の群になるに従って、明確に満足度が低下していく。これらの項目の基盤となっているであろう「志望」の項目においても同様の傾向が見られる。一方、「単位数」、「正課授業時間」、「授業時間外学習時間」の項目とは相関が弱いという結果である。

志望に裏打ちされた強い学習意欲が学習行動を伴って満足度に繋がるということは予想できることであるが、「成績評価に対する納得度」も学生が満足感を得るために強い効果をもつことが認められた。ただし、今年の満足度はコロナ禍の影響を強く受けており、表 6 を昨年までの経緯と比べつつ考察を進めるべきであることを指摘しておく。

前章で述べたように、学生の意識としては 2 回生進級時の「期待実現度」や「満足度」が記憶に残り、卒業時アンケートにおける全学共通教育での向上感、ひいては大学生活を通じての全学共通教育に対する最終評価に繋がるものと思われることから、重要調査項目として継続して注視していきたい。

◇学生の満足度に影響を与える因子の分析

志望意識（将来活躍したい分野）、希望分野と専門分野の一致度、学習意欲（後期開始時）、取得単位数、成績評価への納得度、正課授業出席時間、授業時間外学習時間、の各質問について、①～④（または①～⑤）の回答群のそれぞれで満足度の平均値を求め、表 6 にした。

ここで、満足度の平均値 ＝（4 x ①満足している ＋ 3 x ②ある程度満足している ＋ 2 x ③あまり満足していない ＋ 1 x ④不満である）／全回答者数

＜表 6　各項目の分類①～④（⑤）毎の満足度の平均値＞

	志望 Q.04	一致度 Q.06	意欲 Q.09	単位 Q.23	納得度 Q.32	正課授業 Q.37	授業外学習 Q.38
①	3.06	3.08	3.23	3.04	3.11	2.96	2.92
②	2.93	2.85	3.03	3.19	2.76	2.83	2.98
③	2.91	2.62	2.82	3.16	2.32	2.96	3.16
④	2.65	2.41	2.53	3.14	1.50	2.83	3.11
⑤			2.09	2.97		2.66	2.43

注）満足度の平均値は　2.89、表中①～④（⑤）の回答群の意味は以下に記載の通り

Q.04 志望意識（現在）（①：はっきり決めている、②：大まかには決めている、③：いくつかあったが、どれとは決めていない、④：あまり決めていない）

Q.06 希望分野・専門分野一致度（現在）（①：よく一致している、②：まあ一致している、③：どちらかというと一致していない、④：あまり一致していない）

Q.09 学習意欲（後期開始時）（①：非常に意欲あり、②：まあまあ意欲あり、③：どちらともいえない、④：あまり意欲なし、⑤：まったく意欲なし）

Q.23 取得単位数（①：単位≧65、②：65＞単位≧60、③：60＞単位≧55、④：55＞単位≧50、⑤：50＞単位≧40）

Q.32 成績納得度（①：納得している、②：どちらかといえば納得している、③：どちらかといえば納得できない、④：納得できない）

Q.37 正課授業出席時間（①：6.0h 以上、②：5.0～5.5h、③：4.5h、④：3.0～4.0h、⑤：2.5h 以下）

Q.38 授業時間外学習時間（①：3.0h 以上、②：2.0～2.5h、③：1.5h、④：1h、⑤：0.5h 以下）

１２．まとめ

２回生進級時アンケートは、入学後１年間の大学生活を経て、学生諸君がどのような学習を行い、どのような意識をもっているかを把握して、教養・共通教育の改善に役立てることを目的としている。従来のアンケートの一部を継承して経年変化の追跡を可能にしながら、入試種別、学部別の解析群を設定し、全学、文系、理系の括りの他、必要に応じてより細かな解析区分を採用することにより、結果をもたらした要因についての手がかりを得る形式にしている。また、アンケート結果の解析においても、教育改善のためのデータを得るという観点を強く意識した。毎年の結果は、多くの点で同様の傾向を示しているが、学生の学習動向や生活実態には大きな慣性があり、年により大きく変化することはない。しかし、近年の CAP 制の導入・変更や英語教育の改革などに伴う学習行動や意識の変化傾向を把握することは、今後を予測するために重要であり、それにも増して、教育的な問題点を把握し、改善のきっかけを掴むために重要である。

さらに、昨年度は COVID-19 感染症の世界的流行により、非対面授業への移行など一年を通して大きな影響を受けてきた。アンケートの項目によっては大小さまざまな影響を受けているはずで、年々の変動があるデータからコロナ禍の影響をより正しく認識するにはこれまで蓄積してきたデータおよび今後得られるであろうデータも含めて丁寧に解析する必要がある。ここでは、本報告書の報告内容でおそらくコロナ禍の影響を受けていると考えられる質問項目、表示した図表、および、簡単な概要を速報しておく：

Q7～Q11 学習意欲；　図 7 学習意欲の経年変化、図 9 学習意欲の変化・全体比率

（図 7）5 段階評価の平均値が 0.2～0.3 ほど低下。2006 年以降でほとんどが最低値

（図 9）「あまり意欲なし」「全く意欲なし」が増加

Q17 英語能力の向上感；　図 14 英語能力の向上感

2017 年度から 2019 年度にかけて 15%前後向上感が増加していたが、今年 5%程度の減少

Q35～Q43 学生生活関連；　図 34～図 42；表 5　1 回生の学生生活時間（＋過去の報告書）

（図 35）運動系クラブ・サークルに入っていた学生は約半数→35%程度、逆に、入っていない学生は約 40%から 20%以上増加

Q44 期待の実現度；　図 44 期待の実現度

肯定的回答は昨年まで上昇傾向が続いていたが、今年は減少。逆に、「実現されなかった」が過去 5 年間で最大の 11%となった

Q45、Q46 改善の要望；　図 46 全学共通科目の改善要望（最重要項目）

「特に要望はない」が年を追って増えて昨年 40%を越えたが、今年は 10%ほど減少。一方で「非対面授業の改善」は 20%以上を占めている

Q47 満足度；　図 47 総合的満足度

「満足している」が 10%近く減少。「ある程度満足している」を加えた肯定的意見は、2017 年から 78%→83%→85%→88%→76%と推移しており、今年 10%以上減少したものの依然として高レベル

Q.48 自由記述欄；　記入件数

本アンケート形式となった 2017 年度以降の 5 年間で、96→219→255→225→352 と推移してきており、今年はそれまでの 3 年間に比べて 100 件以上、5 割以上の増加となっている。

一方、影響が少なかったと思われるものは、

Q32 成績評価への納得度；　表 4 成績評価への納得度

最近では毎年肯定的な回答が 90%以上を維持（変化なし）

Q33 成績評価に納得できなかった理由；　図 31 成績評価に納得できなかった理由

ここ 5 年ほどはおよそ一定に落ち着いた模様

アンケートの設問をする段階で想定していたように、

志望意識 → 学習意欲 → 学習行動 → 学習成果 → 向上感（満足度）

の正の連鎖は、今回の結果を見ても確かに成立している。教育効果の向上を図るためにはこの正しい流れを維持し拡大する施策を行うとともに、問題点を早期に把握して負の連鎖になる芽を摘み取る努力がもとめられる。本年度のアンケート結果からは、次のような点を指摘できる。昨年度までと共通の点が多数あるが、今年度の特徴も加えて以下に列挙する。

・入学時、将来活躍したい分野（志望）についての学生意識は学部により大きな差があるが、入学後のさまざまな経験から次第に自身の将来像が明確になる傾向が見られる。それに伴い志望意識と専門との一致度も次第に改善している。しかしながら入学後の学習意欲の低下は相変わらず深刻である。各学部で教育体系、カリキュラムの再点検をされるとともに、将来に向けたキャリアパスや学習の動機付けとなる情報を、入学前のみならず入学後にも学生対して積極的に提供されることが必要である。

・特に新入生にとって、生活環境や大学での学び方が激変し、各学部での履修指導ガイダンスや 1 回生前期のカリキュラムが、学習意欲に強い影響を与えていることが推測される。今年の調査でも多くの学部で 2 回生進級時の学習意欲に回復がみられたことは好ましい傾向である。各学部で進級時ガイダンスに力を入れていただいた効果と推察している。

・外国人教員による英語授業、E 科目の設定等、英語教育の改革が進められているにも関わらず、英語能力に向上感をもてない学生が多い。向上感をもてる英語学習を実現するための努力がもとめられる。ただし、最近の調査では、文系、理系とも向上感が増加する良い傾向が見られてきた。引き続き英語教育の改善を進めながら、学生諸君の意識変化を注視していきたい。

・ILAS セミナーは例年高い評価を得ている。すでに、全学の教員の協力を得て、238 科目が提供されているが、今後はより新入生に魅力あるテーマを設定する一方で、履修状況に応じた定員の増加等、抽選に外れて受講できない学生を少なくする対策を講じることが、約 75%である受講率をさらに上げるためには効果的と思われる。

・１回生の取得単位数については、文系・理系ともおよそ過半数の学生が 60 単位以上を取得しており、学部による違いも著しい。この状況は明らかに過剰履修であり、卒業単位数、標準修業年数からみても異常状態にある。カリキュラム、履修指導、要卒単位の再検討が必要である。また、2020 年度から強化された CAP 制の実施状況については学部ごとの詳細データに基づいて検証を行い、速やかに改善策を講じる必要がある。機関別認証評価においても、「履修登録科目に関する単位の上限の設定（CAP 制）

等について、適切であるか」が問われているように、各科目で学生自ら考察を深め、授業で得た知識を定着させる学習時間の確保が求められている。

・成績評価について、評価基準の透明性、公平性をもとめる声が、特に理系学生で大きくなっている。成績評価の方法を明示し、科目間・クラス間の不公平感を改善することが求められる。これは GPA 制度の導入が教育改革に資するとされた主要な論点の一つであることを改めて認識するべきである。

・１回生で運動時間が不足している学生が多く、健康管理について新入生ガイダンス等でより強くアピールすることが必要である。また、本学の環境や運動施設は貧弱と言わざるを得ない。一般学生が手軽に運動を楽しめる環境の整備が望まれる。

・かねてから言われているように、授業外学習時間がコロナ禍の影響を受けた今年でも１科目当たり 0.8 時間と明らかに不足している。受講科目数や取得単位数を増加させることよりも、自ら学ぶ姿勢を喚起する授業を推進することが、教育の量から質への転換を促し、教育効果を上げる道筋になると思われる。

・教養・共通教育への満足度は、「学習意欲」と「成績」のみならず、「成績評価への納得度（信頼性）」から形成される。教育改善の議論においては、この点にも注意を払うべきである。

・Q.48 で述べられた改善要望において、履修登録、定員制限と抽選についての意見が多数寄せられた。教育効果を考えるとクラスサイズが過大にならないように一定の定員を設けることは避けられないが、不満を招く一つの大きな要因は、いわゆる楽勝科目という風評により履修者が一部科目に殺到し、本当にその科目を受講したい学生が履修できないという事態にある。各授業の到達目標の設定と成績評価の在り方、授業外学習の組み入れ等、教育システムとしての問題点を全教員が共有し、共通の認識の下に改善に取り組むことが要望されている。また、学生諸君に対して施策の意図を伝えて理解を得る努力が求められる。

第５章　大学教育での向上感　において設けた Q.12~Q17 の質問は、各学部におけるカリキュラムポリシーやディプロマポリシーに関連する内容である。２回生進級時アンケートは、入学後の一つの通過点でのモニターという位置づけにある。2017 年度卒業生より、卒業生進路調査アンケートのいくつかの項目でリンクを可能にした。その結果を「５．大学教育での向上感」に記載している。そこで示したように、「専門以外の幅広い知識と教養」や「専門分野で基礎となる学力」の向上感に対する肯定的回答率は、卒業時においてともに 80％を超えていた。また、この２回生進級時アンケートでも、Q.44「全学共通科目に対する期待の実現度」が 65％以上、Q.47「満足度」はさらに 75％以上の肯定的意見が得られた。このように、２回生進級時における教養・共通教育に対する満足度が卒業時においても保持され、大学生活全体を通じた印象、評価に繋がっていることが示唆された。このことに留意して、継続した改善努力が求められる。

今後は、本アンケートで示唆された重要項目について、教務データ等のより正確な資料をもとに検証した上で、アンケートの指摘が事実であれば具体的な対策を講じられるように切に願うものである。今年も学部の進級時ガイダンスでの本アンケートへのご協力をお願いし、また学部とともに教育院関係者にも回答率改善のためのご努力をいただいた。これらのご協力に改めて感謝したい。

最後に、長文のアンケートに耐えて回答し貴重なデータを提供していただいた学生諸君に厚く御礼を

申し上げる。また、膨大なデータを的確に、工夫を凝らして解析していただい国際高等教育院事務部の皆様に感謝を申し上げたい。

2021 年度　2 回生進級時アンケート（2020 年度入学生）
（実施期間：2021/04/01 - 2021/06/02）

・実施要項（PDF ファイルにて表示、以下内容）
＊本アンケートは記名式で行います。
＊有効回答のなかから抽選で粗品を進呈いたします。
＊回答結果は、個人が特定できる形での公表はしません。
＊なお、学生番号と氏名は大学から当選者への連絡・確認に使用します。
＊本調査は、入学後 1 年間の大学生活を振り返って、京都大学の教育、特に教養・共通教育に対してどのように取り組み、どのような感想を抱いているか、について 2 回生進級時点での意識調査を行い、今後の京都大学の教育を改善・充実するための基礎資料にすることを目的としています。
＊あなたの昨年度 1 年間を振り返って回答してください。

Q.01　あなたが京都大学に入学した入試区分を選択してください。
①一般入試（文系）　②一般入試（理系）　③特色入試　④外国人留学生特別選抜　⑤その他

Q.02　あなたの学部を教えてください。
①総合人間学部　②文学部　③教育学部　④法学部　⑤経済学部　⑥理学部　⑦医学部（医学科）
⑧医学部（人間健康科学科）　⑨薬学部　⑩工学部　⑪農学部

Q.03　あなたが入学したとき、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていましたか。
①はっきり決めていた　②大まかには決めていた　③いくつかあったが、どれとは決めていなかった
④あまり決めていなかった

Q.04　今現在、自分が将来活躍したい分野（希望分野）を決めていますか。
①はっきり決めている　②大まかには決めている　③いくつかあるが、どれとは決めていない
④あまり決めていない

Q.05　入学してから現在までに、その希望分野は変わりましたか。
①変わっていない　②変わった

Q.06　現在のあなたの希望分野と学部でこれから学ぼうとする専門分野は、どの程度一致していますか。
①よく一致している　②まあ一致している　③どちらかというと一致していない
④あまり一致していない

Q.07　入学当初から現在までに、あなたの学習意欲はどのように変化しましたか。各時期について、次の 5 つから選択してください。なお、この質問は Q.7～Q.11（入学当初、前期半ば、後期開始、後期半ば、現在）まであります。
＜入学当初の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.08＜前期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.09＜後期開始の時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.10＜後期半ばの時期＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.11＜現在＞
①非常に意欲あり　②まあまあ意欲あり　③どちらともいえない　④あまり意欲なし
⑤まったく意欲なし

Q.12　入学後 1 年間の授業を受けて、人間社会や自然についての幅広い視野と教養は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.13　1 年間で、あなた自身が問題を発見し、論理的に解決法を考える力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.14　あなたの専門分野で基礎となる学力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.15　1 年間で、自分の考えを表現し、相手の意見を理解するコミュニケーション能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.16　1 年間で、自ら考え、主体的に行動する能力は、どの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.17　1 年間で、あなたの英語の能力（英語以外の言語を第 1 外国語とした方は、その言語の能力）はどの程度、向上したと思いますか。
①大いに向上した　②ある程度向上した　③あまり向上しなかった　④全く向上しなかった

Q.18　1 回生で ILAS セミナーを履修しましたか。
①履修した　②予備登録をしたが履修しなかった　③予備登録をしなかった

Q.19　Q.18 で「履修した」を選んだ方へ：セミナーで学習した知識や経験について満足していますか。
①とても満足している　②どちらかというと満足している　③どちらかというと満足していない
④満足していない

Q.20　Q.18 で「予備登録をしたが履修しなかった」を選んだ方へ：履修しなかった理由は何ですか。
①抽選に外れてしまった　②希望順位の低い科目だったのでやめた　③履修できない曜日・時限だった
④何度か授業に出たが興味をもてなかった　⑤何度か授業に出たが他の活動と両立できなかった
⑥その他（記述回答）
備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.21　Q.18 で「予備登録をしなかった」を選んだ方へ：予備登録をしなかった理由は何ですか。
①履修したいと思わなかった　②空いている曜日・時限に希望する科目がなかった
③予備登録に間に合わなかった、または忘れた　④忙しくて履修できそうになかった
⑤その他（記述回答）
備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.22　スポーツ実習 IA・IB、物理学実験、基礎化学実験、生物学実習 I・II・III、地球科学実験のうち、１回生で履修した科目の□欄にチェックをつけてください（複数可）。いずれも履修しなかった人はチェックをせずに次の質問へ進んでください。
□スポーツ実習 IA　□スポーツ実習 IB　□物理学実験　□基礎化学実験　□生物学実習 I
□生物学実習 II　□生物学実習 III　□地球科学実験

Q.23　あなたは 1 回生の間に何単位を取得しましたか。全学共通科目に加えて、専門基礎科目、専門科目を含む合計を、1 回生終了時に受けとった成績表で確認してお答えください。
①単位≧70　②70>単位≧65　③65>単位≧60　④60＞単位≧55　⑤55＞単位≧50
⑥50＞単位≧45　⑦45＞単位≧40　⑧40＞単位≧35　⑨35＞単位≧30　⑩30＞単位≧25　⑪25＞単位

Q.24　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「前期」の取得単位数はどれくらいですか。
①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20
⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

Q.25　Q.23 について、その取得単位数のうち、全学共通科目について「後期」の取得単位数はどれくらいですか。

①単位≧40　②40>単位≧35　③35>単位≧30　④30＞単位≧25　⑤25＞単位≧20
⑥20＞単位≧15　⑦15＞単位

Q.26　1 回生の間に単位を取得した「人文・社会科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.27　1 回生の間に単位を取得した「自然科学科目群」の科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.28　1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の英語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.29　1 回生の間に単位を取得した「外国語科目群」の初修外国語科目について、あなたの授業出席率はどれくらいですか。
①ほぼ 100%　②約 80%　③約 60%　④50%以下

Q.30 あなたの 1 回生（前期＋後期）終了時の GPA はどのレベルですか。1 回生終了時に受けとったあなたの成績表で確認してお答えください。
①GPA ≧4.0　②4.0＞GPA≧3.5　③3.5＞GPA≧3.0　④3.0＞GPA≧2.5　⑤2.5＞GPA≧2.0
⑥2.0＞GPA≧1.5　⑦1.5＞GPA

Q.31 あなたが 1 回生後期（2020/10/31～11/1）に受けた TOEFL-ITP のスコアはどのレベルでしたか。
①スコア≧550　②547≧スコア≧503　③500≧スコア≧450　④447≧スコア　⑤受験していない

Q.32　1 回生時の全学共通科目の成績評価についてお尋ねします： 全体として自分の成績評価に納得していますか。
①納得している　②どちらかといえば納得している　③どちらかといえば納得できない
④納得できない

Q.33　Q.32 で「どちらかといえば納得できない」又は「納得できない」を選んだ方へ：成績評価に納得できなかった理由は何ですか。次の中からあてはまる全てのものにチェックをつけてください。
①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる
③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった
④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他（記述回答）
備考：その他（記述回答）上限 20 文字まで。

Q.34　Q.33 で選んだもののうち、最も重要なもの 1 つを選択してください。
①成績評価が厳しすぎる　②成績評価が甘すぎる
③成績評価の基準や方法が学生に対して明確に示されていなかった
④成績評価の基準や方法が不公正である　⑤その他

Q.35　平均して 1 週間に何時間程度、運動（スポーツ、散歩、ジョギング、サイクリング等）をしていますか。
①ほぼ 0 から 1 時間程度　②2～3 時間程度　③5 時間程度　④7 時間程度　⑤10 時間程度
⑥15 時間程度　⑦20 時間程度　⑧25 時間程度　⑨25 時間以上

Q.36　あなたは、１回生のときに運動系のクラブやサークルに入っていましたか。
①入っていた　②一時、入っていたが止めた　③入っていない

授業期間中のあなたの平均的な一日（休祝日を除く月曜日～金曜日）における、Q.37~Q.42 の活動時間を教えてください。なお、活動時間の項目は、＜正課の授業出席時間＞＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞＜通学時間＞＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞＜アルバイトの時間＞　です。ただし、ここでは便宜的に、非対面授業のオンライン・オンデマンド型は＜正課の授業出席時間＞に、課題研究型は＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞に加えてください。

Q.37 ＜正課の授業に出席する時間＞（1 コマの授業は 1.5 時間です）

Q.38　＜授業の予習・復習・レポート作成等の時間＞

Q.39　＜往復の通学に要する時間＞

Q.40　＜授業とは直接関係のない学習や読書の時間＞

Q.41　＜クラブ・サークル等の課外活動時間＞

Q.42　＜アルバイトの時間＞

Q.43　授業期間中のあなたの平均的な週末（土曜・日曜）において、授業の予習・復習・レポート作成等に費やす時間があれば、土曜・日曜の合計時間を答えてください。

Q.44　全体として、あなたが全学共通科目に対して抱いていた期待は実現されましたか。
①実現された　②どちらかといえば実現された。
③どちらかといえば実現されなかった。　④実現されなかった。

Q.45　今後の全学共通科目に対して、どのような改善を要望しますか。次の中からあてはまる全てのものの□欄にチェックをつけてください。
①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい
⑩その他（具体的な内容は Q48 にて回答してください）

Q.46　Q.45 で選択したもののうち、最も重要なものを選んでください。
①特に要望はない　②学生の関心により対応した内容の授業をしてほしい
③学生の予備知識や理解度をもっと考慮してほしい　④授業の進め方をもっと工夫してほしい
⑤授業にもっと熱意をもってほしい　⑥学生とのコミュニケーションをもっととってほしい
⑦成績評価の基準・方法をもっと明確にしてほしい　⑧教室環境(設備・広さなど）を改善してほしい
⑨非対面授業（オンライン・オンデマンド・課題研究など）を改善してほしい
⑩その他（具体的な内容は Q48 にて回答してください）

Q.47　この１年間に受けた教養・共通教育を総合的に判断して、学んだことに満足していますか。
①満足している　②ある程度満足している　③あまり満足していない　④不満である

Q.48　最後に、今後の教養・共通教育の改善点や要望があれば、要点を簡潔に記入してください。良かったこと、感動したこと、印象等でも結構です（自由記述・500 文字制限）。
備考：質問はここまでです。ご協力ありがとうございました。

2021（令和 3）年度 2 回生進級時アンケート報告書

令和 4 年 1 月　発行

編集　　京都大学国際高等教育院

発行　　京都大学国際高等教育院

〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
Tel 075-753-6690/6513